はじめに

日本サッカーのルーツ校と言える筑波大学蹴球部が、2016 年 3 月に創部 120 周年を迎えました。高等師範～文理科大～東京教育大～筑波大と続くこのクラブの歴史は、日本サッカーのあゆみと深くかかわっています。

そこで今年度の公開シンポジウムでは、「日本サッカーのルーツを語ろう！－東京高等師範学校の足跡を中心に」と題して、日本へのサッカー導入期から学校スポーツとしての展開と発展、世界への挑戦を、大戦期までについて取り上げることとしました。日本サッカー殿堂入りされた偉大なジャーナリスト、賀川浩さんと牛木素吉郎さんに加え、筑波大学体育専門学群長でスポーツ史研究の第一人者である真田久さんにご登壇いただいたシンポジウムの内容は、本報告書のシンポジウム編に掲載されています。

寄稿編は、本テーマと関わりの深い方々からの貴重な原稿です。1904 年 2 月 6 日は日本人が初めてサッカーの対外試合を行った記念日ですが、東京高師の対戦相手は横濱カントリーアンドアスレティッククラブ（YC&AC）。細貝貞夫さんは、尊王攘夷のムードいっぱいの当時の日本にやってきた外国人たちが、文字通り命を懸けてスポーツに夢中になっていた様子をご紹介されています。

東京高師とともにその附属中学校もまた日本サッカーのルーツ校と言えるでしょう。1936 年のベルリン五輪代表チーム主将の竹内悌三さんのご長男、竹内宣之さんは、「二人の息子には附属でサッカーをさせるように」との父の遺言に沿って附属でサッカーに励んだことを紹介されています。同じく附属サッカー部 OB の後藤邦夫さんからも、1960 年代までの日本サッカーの様子が、当事者目線で紹介されています。後藤さんのお父さんは、戦前最後の東京高師蹴球部長、後藤岩夫さんです。

シンポジウムでは嘉納治五郎校長が、中国からの留学生を多く受け入れていたことが紹介されました。蹴球部にも戦前から多くの留学生が在籍していましたが、張希飛さんは戦後も様々な形で東京教育大学、筑波大学蹴球部を支援された方です。そのご子息がシンポジウムに参加され、自分の父親がなぜ日本に来たのか、どのような人生を歩んできたのかをまとめてくださいました。いずれも大変貴重な「歴史の証言」です。

大戦前の日本サッカーのことを、実体験とともに語ることができる方はごくわずかになってしまいました。いまのうちにお聞きしておきたいことが多々あります。それはただの昔話ではありません。歴史を知ることによっていまを理解し、これからの方向性を正しく見据えるための「道しるべ」となるものです。

本報告書が多くの方の目に触れ、日本サッカーのルーツと先人たちの努力の物語を、少しでも共有することができれば幸いです。

演者の皆さん、参加された方々、そして寄稿してくださった方々には、この場をお借りして心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2017（平成 29）年 3 月
特定非営利活動法人サロン 2002
理事長　中塚義実

目　　次

はじめに 1
NPO法人サロン2002理事長　　中塚義実
目　次 2

シンポジウム編 3
シンポジウム開催要項 4
はじめに 6
１．日本へのサッカーの移入 8
スポーツジャーナリスト　牛木 素吉郎
２．嘉納校長時代の東京高師 14
筑波大学体育専門学群長　　真田　久
３．東京高師の日本サッカーへの貢献 19
筑波大学附属高校　　中塚 義実
４．戦前の日本サッカーの思い出 23
スポーツジャーナリスト　　賀川　浩
５．日本サッカーの組織化と戦前の日本代表 27
６．戦後初の全日本選手権と前座試合（1946） 34
７．参加者・演者より 36
配布資料 39
参加者アンケート 56

寄　稿　編 57
日本におけるスポーツの起源－「横濱外人倶楽部」からみた移入期の日本のスポーツ 58
（公社）横浜カントリーアンドアスレチッククラブ理事　　細貝 貞夫
父（竹内悌三）の遺言－「二人の息子には、附属でサッカーをさせる」 61
東京教育大学附属高校 68 回卒業生／(株)アラントレイディング取締役　　竹内 宣之
我が青春のサッカー記－父（後藤岩男）の後を追って 65
東京教育大学附属高等学校 71 回卒業生／元筑波大学教授　　後藤 邦夫
父 張季飛（1930年:昭和五年文一入学）とサッカーと中国 69
明治大学教養デザイン研究科博士（後期）課程　　張　寿山

資　料　編 75
サロン2002月例会一覧（1997～2016） 76
サロン2002公開シンポジウム一覧（2001～2016） 82

シンポジウム参加者・報告書作成にご支援いただいた方々 83

シンポジウム

日本サッカーのルーツを語ろう！
東京高等師範学校の足跡を中心に

牛木　素吉郎

（スポーツジャーナリスト／2011 年第 8 回日本サッカー殿堂入り）

真田　久

（筑波大学体育専門学群長／筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長）

賀川　浩

（スポーツジャーナリスト／2010 年第 7 回日本サッカー殿堂入り）

中塚　義実※

（NPO 法人サロン 2002 理事長／茗友 SC 理事長／筑波大学附属高校教諭）

※コーディネーターを兼ねる

2016.12.12.

NPO法人サロン2002　公開シンポジウム2016

日本サッカーのルーツを語ろう！

－東京高等師範学校の足跡を中心に－

特定非営利活動法人サロン 2002 は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とする NPO です。月例会はすでに 240 回を越え、公開シンポジウムでは毎年さまざまな話題を取り上げてきました。

今年のシンポジウムでは、日本サッカーのルーツ、具体的には明治初期に外来文化としてもたらされたサッカーの導入期から、戦争で中断する昭和初期までを取り上げます。近代国家の形成期にあたる当時の人たちが何を考え、どのような行動を起こし、どうなっていったのかを語り合う場にしたいと考えます。

ちょうど今年、日本サッカーのルーツである筑波大学蹴球部が創部 120 年を迎えます。第 1 回近代オリンピックと同じ年に、筑波大学の前身である東京高等師範学校の嘉納治五郎校長が、放課後の“部活動”を奨励したのがこの部の始まりです。同校の卒業生が全国各地の学校に赴任してサッカーの種をまいていったことはよく知られています。このことは、大戦前だけでなく、いまにつながる独特の日本のスポーツ環境に通じるものがあります。シンポジウムではこのようなことも明らかにしていきたいと考えます。

シンポジウム終了後は、同会場にて懇親会を企画しています。さまざまな立場の方が集い、立場を越えて交流する場となることを願っています。

歴史の中に身を置きながら、年末のひとときを多くの方とともに過ごせることを願っています。

特定非営利活動法人サロン2002
理事長　中塚義実

記

主　催 ： 特定非営利活動法人サロン 2002

後　援 ： 筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、(公社)横浜カントリーアンドアスレティッククラブ、(公財)日本サッカー協会、日本サッカーミュージアム、

協　力 ： 日本サッカー史研究会

日　時 ： 2016(平成 28)年 12 月 17 日(土) 14:00～17:00 (受付 13:30～)

会　場 ： 桐陰会館
〒112-0012　東京都文京区大塚1-9-1(筑波大学附属中学・高校　敷地内)
東京メトロ 有楽町線 護国寺駅 5 番出口より徒歩 8 分
東京メトロ 丸ノ内線 茗荷谷駅 より徒歩 10 分

演　者 ： 真田 久(筑波大学体育専門学群長／筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長)
賀川 浩(スポーツジャーナリスト／2010 年第 7 回日本サッカー殿堂入り)
牛木 素吉郎(スポーツジャーナリスト／2011 年第 8 回日本サッカー殿堂入り)
※中塚 義実(NPO 法人サロン 2002 理事長／茗友 SC 理事長／筑波大学附属高校)
※コーディネーターを兼ねる

参加申込 ： サロン2002公開シンポジウム参加申込フォームからお申し込みください
https://goo.gl/forms/PMp1sbAnHAzZUc5Y2

参 加 費 ： 2,000円(ただし学生は無料)　　※懇親会参加費は3,000円(学生1,500円)程度を予定

事務局 ： 遠山 諒　※お問い合わせは salon2002.info@gmail.comまでお願いします。

＜特定非営利活動法人サロン 2002 とは＞

前身の「スポーツ文化研究会サロン 2002」は、本文末の設立宣言に賛同する“同志”によるゆるやかなネットワーク組織でした。

設立宣言に掲げた“志”を引き継いで、ゆるやかなネットワーク（スポネットサロン 2002）の運営をはじめとする諸事業に取り組む NPO の設立総会が開かれたのが 2014 年 5 月 31 日。10 月 14 日に東京都から認証を受け、10 月 24 日に正式に特定非営利活動法人サロン 2002 が設立しました。

全国各地にいる約 100 名のスポネットサロン 2002 メンバーと約 30 名の NPO 会員は、小・中・高・大の学校関係者、スポーツ指導者やトレーナー、スポーツクラブの運営に携わる方、フットサルや草サッカーの関係者、新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどのメディア関係者、サポーターやボランティア、国や地方自治体のスポーツ行政に携わる方や競技団体関係者、医者や弁護士など多種多様です。さまざまな角度からスポーツに携わり、“志”の実現に向けて活動する者で構成されるのが「サロン 2002」です。

NPO 法人サロン 2002 の主たる活動は、2016 年 11 月で通算 243 回を数える月例会の開催と、その内容を軸とするホームページの運営です。本シンポジウムは公開型月例会として 2001 年度よりほぼ毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。

詳細はホームページ＜http://www.salon2002.net＞ をご覧ください。

＜サロン 2002 公開シンポジウム＞

2001 年度…FIFA ｺﾝﾌｪﾃﾞﾚｰｼｮﾝｽﾞｽﾞｶｯﾌﾟ総括
2002 年度…FIFA ワールドカップ総括
2003 年度…地域で育てるこれからのスポーツ環境
2004 年度…totoを活かそう！
2005 年度…クラマーさん、ありがとう！
2006 年度…2006 年ドイツで感じたこと
2007 年度…ｻｯｶｰ観戦を楽しもう！ -ｽﾀｼﾞｱﾑ編
2008 年度…地域からみたJリーグ百年構想
2009年度…2019年ﾗｸﾞﾋﾞｰﾜｰﾙﾄﾞｶｯﾌﾟを語ろう！
2010年度…育成期のサッカーを語ろう！
2011年度…高校サッカー90年史を語ろう！
2012年度…U-18フットサルを語ろう！
2013年度…スポーツクラブの法人化を語ろう！
2015年度…スポーツで“ゆたかなくらし”を！

サロン 2002 設立宣言

（2000 年 4 月 1 日）

我々は、以下に「サロン 2002 の“歴史”」、「サロン 2002 の“志”」及び「サロン 2002 の“会員”」を述べることにより、ここにあらためてサロン 2002 の設立を宣言する。

【サロン 2002 の“歴史”】

サロン 2002 は、社会学、心理学等の専門的立場からサッカーの分析・研究・報告に従事していた「社・心グループ」（財団法人日本サッカー協会科学研究委員会の研究グループの一つで、1980 年代後半からこの名称で活動）を前身とし、1997 年からは研究者という枠にとらわれない、幅広い人材によって構成されるゆるやかな情報交流グループ「サロン 2002」として活動を行ってきた。

【サロン 2002 の“志”】

サロン 2002 は、サッカー・スポーツを通して21世紀の“ゆたかなくらしづくり”を目指すことを“志”とする。年齢、性別、国籍、職業、専門分野、生活地域などを超えた幅広いネットワークを築き上げ、全国各地にサロン 2002 の“志”の輪を広げ、大きなムーブメントとなることを目指す。

サロン 2002 の“志”を実現する上で、2002 年 FIFA ワールドカップ韓国／日本大会は大きな節目であると認識する。国内外の様々な人々と協力しながら、この世界的なイベントの“成功”に貢献するとともに、同大会後の“ゆたかなくらしづくり”のためにできることを考え、行動する。

【サロン 2002 の“会員”】

サロン 2002 は、前項の“志”を同じくする人たちのゆるやかなネットワークである。

サロン 2002 の“志”に賛同した個人であれば、誰でも、“会員”となることができる。ただし会員は、サロン 2002 からの“Take”を求めるだけでなく、サロン 2002 に対して、また社会に対して何が“Give”できるかを常に考え、“Give and Take”の姿勢でいるということが前提である。

サロン 2002 は、会員に対して短期的な成果は求めない。長い目で見た“Give and Take”の関係が成り立っていればよい。即座のアウトプットが困難であっても、いずれ何らかの形での“Give”を考えている人なら“会員”となることができる。

NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2016

日本サッカーのルーツを語ろう！

－東京高等師範学校の足跡を中心に－

オープニング映像（約 15 分）

はじめに

笹原

今日は絶好の行楽日和にもかかわらず、我々のシンポジウムにお越しいただきましてまことにありがとうございます。私は今日の総合司会を務めさせていただきます、NPO 法人サロン 2002 副理事長の笹原勉です。よろしくお願いします。

総合司会：笹原勉氏

今回のシンポジウム、「日本サッカーのルーツを語ろうー東京高等師範学校の足跡を中心に」は、我々「サロン 2002」が開いた 14 回目のシンポジウムでございます。スポーツ文化ネットワークサロン 2002 というのは、スポーツを通じたゆたかなくらしづくりを目指すことを“志”にする仲間たちの緩やかなネットワークです。日本各地に 100 名ほどのメンバーがいます。メンバーには学校の先生、スポーツの指導者、各競技団体の関係者、このほかに一般のファンの方々など、様々な方がいらっしゃいます。そして、このネットワークの運営、さらにシンポジウムの開催、月例会の開催、こういったことを行っているのが NPO 法人サロン 2002 でございます。ちなみに月例会はすでに 240 回を越えています。我々サロン 2002 としてはネットワークのメンバー、あるいは NPO 法人の会員を募集しています。みなさんのお手許の資料の中に入会案内がございますので、興味ある方はぜひ参加していただきたいと思います。

さて、本日のシンポジウムの主催は、我々NPO 法人サロン 2002 ですが、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、横浜カントリーアンドアスレチッククラブ（YC&AC）、（公財）日本サッカー協会、日本サッカーミュージアムにご後援をいただき、さらに日本サッカー史研究会のご協力を得て開催させていただきます。

ではここで演者を紹介させていただきます。まず、スポーツジャーナリストで 2010 年に第 7 回日本サッカー殿堂入りをされました賀川浩さん。また、スポーツジャーナリストで 2011 年第 8 回日本サッカー殿堂入りをされた牛木素吉郎さん。筑波大学体育専門学群長で筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長をされております真田久さん。コーディネーターを務めますのは NPO 法人サロン 2002 理事長、茗友サッカークラブ理事長、そして筑波大学附属高校教諭の中塚義実でございます。

ではシンポジウムの中身に入ってまいります。ここでマイクをコーディネーターの中塚さんにお渡ししたいと思います。

中塚

ということで中身に入っていきたいと思います。

冒頭の映像で見ていただいたように、筑波大学蹴球部の前身の前身である東京高等師範学校フートボール部が 1896 年に創部します。そこから数えて今年は 120 周年です。この節目の時に、日本サッカーの大きな歩み、特に第二次大戦前のところをきちんと押さえておこうというねらいで今回のシンポジウムを企画しました。年末のいろんなスケジュールが重なっている中、日程調整が非常に難しかったのですが、12 月 17 日に開催が決まったとき、もしかすると最高の日程になるかもしれないなと思いました。理由の一つは、12 月 18 日がクラブワールドカップ（CWC）の決勝戦であるということです。決勝日程はわかっていましたので、その前日に全国からいろんな方が CWC を観に上京してくださるついでに、ここに立ち寄っていただければいいなと。もう一つは、大学選手権、インカレの決勝が 12 月 18 日に行われるということです。もし筑波大学が決勝に進んでくれたりすると、こんなにうれしいことはないなと思っていたら本当にそうなってくれまして、今日は最高の日取り、そして最高の演者、そしてここにお集まりの最高の皆様と、3 時間ほど、この 100 年、120 年の歴史を振り返りながら、日本サッカーのこれまでといま、そしてこれからを考える時間にできればと思います。

シンポジウムの進め方です。牛木さん、真田さんにそれぞれ 25 分から 30 分くらいずつ、まとまった時間で、それぞれご用意いただいたお話をしていただきます。そのあとで私と賀川さんで掛け合いながら、あるいはところどころ牛木さんや真田さんにも口をはさんでいただきながら、第 1 部の後半戦を展開してまいります。そのあと小休止をはさみ、だいたい 16 時から 17 時くらいまでの 1 時間くらいをフロア全体での意見交換の場とできればと考えております。

お手もとにホチキス止めの資料を用意しました（本報告書の 39～55 ページに掲載。本文中では資料に手書きで添えられたページ番号で表記する）。これが今回皆さんにお持ち帰りいただく資料です。

創部 120 周年ということで、今年度当初からいろんなことを筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブで展開しております。資料の 4 ページに記されていますが、現役主催の記念イベントや、YC&AC、中央大学、ソウル大学との交流会で、互いの交流史について確認し合いました。4 ページの上にある写真は、120 周年記念祝賀会のものです。多くの同窓生やお世話になった人たちが参加してくださいました。通常こういった写真には看板が上に掲げられるものですが、この写真にはありません。なぜなら記念撮影の直前に「看板落下事件」が起きまして、これはえらいことだったのですが、みな無事に写真に写ることができました。記念誌も発刊しました。会場後方にご用意しましたので、後ほど手に取ってみていただければと思います。

本日のシンポジウムは茗友サッカークラブではなく、NPO 法人サロン 2002 が主催です。私は NPO の理事長として進行役を務めますが、茗友 SC 理事長の立場で発言することもあるかと思います。ご容赦ください。

資料の 5 ページ，6 ページには牛木さんの話の概要が記載されています。

それではさっそく牛木さん、よろしいでしょうか。

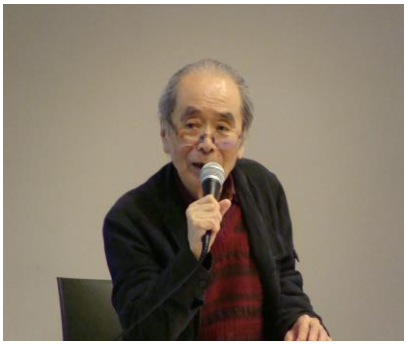
１．日本へのサッカーの移入

スポーツジャーナリスト　牛木 素吉郎

牛木

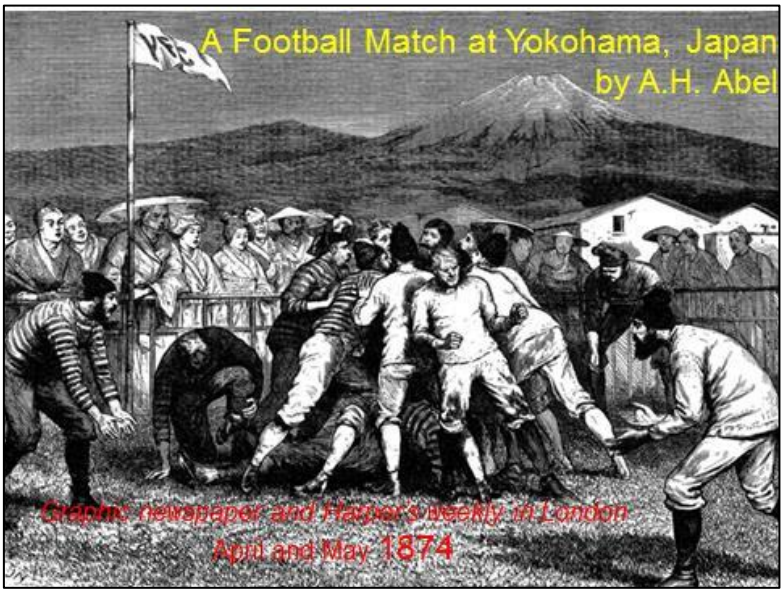
資料の 5 ページ、6 ページに、私が話すことのメモが入っています。だいたい 20 分間でお話しさせてもらいます。

今日お話ししたいことの一つのポイントは、日本にサッカーが入ってきたのは、いつどんな時であったかということです。日本サッカー協会は HP にて、1873（明治 6）年に海軍兵学寮でダグラス少佐がサッカーを教えたことが、日本にサッカーが入った始まりだとしています。間違いではありませんが、それを日本のサッカーの始まりとするのも無理なのではないかと思います。日本の国土の中、日本の土の上でフットボールが行われたということであれば、やはり明治の初期のころに神戸の外国人クラブと横浜の外国人クラブで行われております。



牛木素吉郎氏

これは横浜外国人クラブのサッカーの、外国人同士のサッカーの試合の絵です。後ろの方に富士山が見えていますね。ただ、これはフットボールと言ってもサッカーとは限りません。当時はフットボールと言ってもいろんなフットボールがあり、横浜の外国人クラブに来ているような人たちは、それぞれいろんな学校の出身者がいるからです。



こういうフットボールの試合が行われたということをなぜ我々が知っているかというと、当時外国人クラブの中で発行された英字の新聞があり、毎年 1 月のところに、今年のフットボールの試合はどのルールでやるかということを相談した経緯が書いてあります。出身が様々ですので、ケンブリッジ出身の人は「今年はケンブリッジのルールでやろう」と言ったり、ラグビー校出身の人は「ラグビーのルールでやろう」と言ったりして決めたようで、フットボール＝サッカーとして行われたのはそれよりだいぶ後のことになります。

そういうことも含めて、いつをもって日本サッカーの始まりとするかということが問題です。結論を先に申し上げますと、私の意見としては、明治 37 年に東京高等師範の学生だった中村覚之助がチームを作って横浜の外国人クラブに遠征して試合しました。1904 年 2 月 6 日です。日本サッカー始まりの記念日を作るとしたら、その日にしてはどうかと思っています。

サッカーの普及は東京高等師範学校、今の筑波大学の卒業生が全国の学校に広めたというのが普及した原因ではないか、すべては東京高等師範から始まっているのではないかと思っています。ただ、学校中心に普及したことにはマイナスの面もありまして、野球は大衆的なスポーツになりましたけど、サッカーは学校のスポーツとしてしか普及しませんでした。

サッカーが日本に入ってきたルートとしては、だいたい 3 つのルートが考えられます。一つは外国

人クラブ。横浜と神戸の外国人同士が試合をしたことが始まりだということです。その途中で日本人のチームが外国人クラブと試合したという記録がございます。これが一つのルートですね。もう一つのルートは、明治時代の中等学校（尋常中学校や師範学校など）です。いまの中学 1 年生から高校 1、2 年生くらいまでの中等学校にイギリス人の先生が来て、その先生方が各地でフットボールをやらせたということがあります。これはほとんどがアソシエーションフットボールのようです。それからもう一つは、サッカーのルールに関する本が翻訳され、翻訳本をもとに指導者がそれぞれの学校でフットボールを教えたというルートがあります。昨年でしたか、四国の丸亀の女子高校で女学生がフットボールをやっている絵葉書が 2 枚見つかりました。

明治 39 年 10 月 17 日の香川新報に掲載された写真。全員がこちらを向いている。
出典：丸亀市ホームページ（http://www.city.marugame.kagawa.jp/itwinfo/i17210/)

その写真が日本におけるサッカーの始まりだと新聞にも載っていましたが、実はそうではなくて、その写真は当時の文部省が発行した体育指導者のためのフットボールの方法、授業でやっている様子を卒業記念の絵葉書にしたのだと思います。なぜそう思うかというと、だいたい 100 人ぐらいの生徒が、グラウンド上で写真に顔が見えるように写っているのです。実際の試合ではこんなことはありえないので、卒業記念に撮ったものだろうと思います。ただ、卒業記念に作るためには授業でフットボールが行われていなければできないでしょうから、フットボールはその時から行われていたのだと思います。

「サッカーが日本に入ってきたのはいつだ」と決めつけるわけにはいきませんが、本当の意味で日本にサッカーを普及させたのは、中村覚之助という東京高等師範学校の学生だった人なので、今日もお話しして皆さんに認識を改めていただきたいと思っています。

野球とサッカーの話に移りますと、野球は明治 5 年ぐらいに日本に入ってきて、すぐに明治時代に盛んになりました。少なくとも東京では、明治の終わりごろの早稲田と慶応の試合には満員の観客が入っていたということです。サッカーも野球と同じころに日本に入ってきたにもかかわらず、ほとんど大衆的になっていません。これは一つの疑問です。逆に、世界ではサッカーはたちまち世界中に広がりました。ところが野球はスポルティングという運動具屋さんが一所懸命ヨーロッパや南米に野球を普及させようとして道具を寄付したりしていたにもかかわらず、全く盛んになりませんでした。日本と、アメリカの植民地だったフィリピンで盛んになったということで、なぜ野球は日本では盛んになって世界には普及しなかったのか、なぜサッカーは世界中にすぐに普及したのに日本ではなかなか

普及しなかったのか、この 2 つが私の疑問としているところで、いろんなところで皆さんのご意見をうかがっているわけです。

日本における野球は 1872（明治 5）年）に、開成学校という、いまの東大にあたる学校のグランドでアメリカ人が教えたのが始まりです。アメリカ人のホーレス・ウィルソンという先生が教えました。また、鉄道の勉強のためにアメリカに留学していた平岡熙（ひろし）さんという人がアメリカで野球を覚え、野球の用具を持って帰ってきて教えました。ですから、アメリカ人が日本にやって来て教えたのと、日本人がアメリカから持って帰ってきたのと、ふた通りの方法で日本に入ってきたわけです。サッカーの場合は、幕末から明治にかけてたくさんの偉い人の子どもたちがイギリスに留学し、いろんな勉強をして日本に持ち帰ってきましたが、スポーツは持ち帰ってきませんでした。イギリスにはスポーツクラブがたくさんあって、学校でもスポーツがたくさんあったと思いますが、日本に持ち帰っていないのです。サッカーの本もあまり翻訳されていませんでした。これは不思議なことです。そして、外国から来た先生方が中学校や師範学校の授業でサッカーをやらせることはあったのですが、それがもとでサッカーが広まるということは、明治の半ばごろまではありませんでした。これも不思議なことだと思っています。

私の考えでは、なぜ日本ではサッカーよりも野球の方が早く普及したのかと言いますと、野球の方が入ってくるのが早かったからだと思います。1873（明治 6）年にダグラス少佐が築地の海軍兵学寮でサッカーを教えたというのは適切ではなく、本当の意味での日本でのサッカーの普及は、新田純興（すみおき）さん（高等師範附属小・中学出身）がされていました。ご自身でもサッカーの歴史の本を書いていらしたのですが、その本を書き始めているときに広瀬健三さんという方とばったり会ったそうです。広瀬さんは当時、読売新聞の運動部の記者で、野球、スポーツ討論等を行っていました。そして、広瀬さんが新田さんにサッカーの本を書きたいと言ったら、新田さんは日本でサッカーの始まりといったら明治 6 年の海軍兵学寮だと言ってしまいました。自分たちが中心として始めていたにも関わらずです。そのことがあちこちに引用され、ダグラス少佐は日本サッカーの始まりのように書いてあるわけです。私はそれを訂正したいと思っているのです。ダグラス少佐がサッカーを始めたのは確かで、ちゃんと海軍兵学寮の記録文書にも載っていますが、そこから日本に広まったという形跡は全くありません。やはり最初は、東京高等師範学校の附属中学、小学校から始まっているのではないかということで、他の方々にもお話を聞きたいと思っています。

日本にサッカーが広まったのは学校教育の教材として、実際に行ってみせたのは中村覚之助という人（資料 11 ページ）です。和歌山県の那智勝浦町で生まれました。中村覚之助の子孫の中村統太郎さんが、本日和歌山からお見えになっているのでどうぞ立ってください。(会場から拍手がおこる)

師範学校は学校の先生を育てるところですから、中村覚之助も小学校の先生などを経て、高等師範

に入ってからフットボールをやったわけです。水泳をやっている写真もあります。和歌山県那智勝浦という、海のそばの出身なので、みんな泳ぎがうまかったわけです。

那智勝浦町。八咫烏の看板が見える

中村覚之助の墓

写真は那智勝浦の町ですね。これは中村覚之助のお墓です。明治の終わりごろに立てた中村覚之助のお墓は断然大きいわけです。なぜこんなに大きいかということで裏側を見ると、国の命令で中国に派遣されて、中国から帰ってくる途中に亡くなった、つまり公務中に亡くなったので墓を建てるお金は政府が出したらしいです。このずっと奥の方にもっと大きなものがありまして、それは日露戦争、日清戦争で亡くなった人たちを一緒くたにしたお墓です。個人としては中村覚之助の方が 4～5 倍大きいように思います。非常に景色のいいところでおいしいミカンがなりまして、中村さんに送っていただいてありがたく食べています。魚もいいしミカンもいいし、非常にいいところですね。近くでクジラもとるらしいですね。

那智勝浦町にある中村覚之助の生家

覚之助の学生時代の遺品

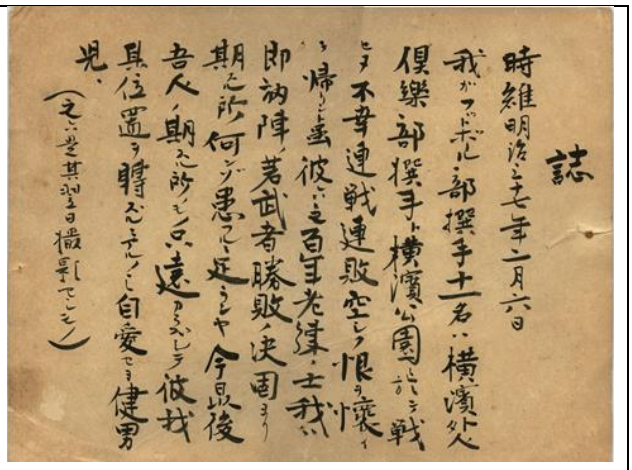
中村覚之助さんの当時の持ち物がとってあったようで、それらを見ると昔の中学生はよく勉強したなということがわかります。もっとも、中学というところはエリートしか行かないところでしたが、それにしても勉強家だったことがよくわかります。英語の書き込みもありました。お兄さんがオーストラリアに出稼ぎに行っていて、そのお兄さんから英語の新聞を送ってもらったりしていたようです。嘉納治五郎が中村覚之助を表彰したその時代、遊泳部を嘉納治五郎さんが作ったりしたわけです。

学生時代の覚之助のノート。数十冊ある

オーストラリアの英字新聞

オーストラリアから送ってきた英字新聞もあります。別にサッカーと書いてあるわけではありませんが、英字の新聞を送ってきたらそれを読みこなしたというところが、明治時代の中学生の勉強ぶりがよくわかるのではないかと思っております。

中村覚之助の功績は、東京高等師範学校でフットボール部を作り、横浜外国人クラブと試合をして、卒業生を全国に送り出したというところにあるのではないか、そしてそれこそが日本のサッカーの始まりとすべきではないかと思っております。日本に野球が広まったきっかけとしては、いまの東大に正岡子規らが野球チームを作って、横浜の外国人クラブと試合をして勝っていたようです。今でもある程度そういうところはありますが、日本がアメリカに勝てば非常にうれしいわけです。野球ではアメリカに勝てましたが、サッカーでは写真のように、東京高等師範学校は 0-9 で負けています。



9 点も取られていたので日本人は喜べませんでした。これも、明治時代に野球が盛んでサッカーがあまり盛んにならなかった一つの原因ではないかと思っています。ただ、中村覚之助がチームを作ってその卒業生が全国に散らばってからは、かなり急速にサッカーも盛んになったと思います。もうあと一歩というところで戦争が起こって中断し、戦後やり直すということになりました。アメリカが日本を占領したので野球はすぐに復活しました。

ですがもう一つの原因は、高等師範学校の卒業生を各中等学校に割り当てて就職させるときに、暖かい地方、例えば静岡や広島にはサッカー出身者を割り当て、新潟や秋田など寒い地方にはバスケットボールの選手を割り当てたのではないかと思っています。というのは、私は新潟の出身で、中学 1

年の時に戦争が終わったのですが、すぐに復活したのはテニスと野球でした。そのほか陸上や水泳は戦争中もやっていましたが、サッカーは全然知りませんでした。サッカーというスポーツがあることすら知らなかったのです。それが、中学 3 年の時に中国の青島というところから引き揚げてきた者が僕らのクラスに入ってきて、彼らがサッカーを我々に教えてくれました。グランドへの線の引き方から教わったくらいです。後に調べたら、新潟でサッカーが行われていたのは、旧制の高等学校と新潟医科大学でした。そして、その選手たちはほとんどが東京の府立五中（いまの小石川中等教育学校）出身で、そこでサッカーをやった者が、たぶん一高や東京高等師範学校を経て新潟高校に来て、サッカーを普及させたのではないかと思います。サッカーの普及のために意図的に卒業生の配置をしたのではないかというのは私の想像ですが、そういうことについてご存知の方がいましたらお聞きしたいと思っております。

どうもありがとうございました。

中塚

ありがとうございました。明治維新以降に外来文化として日本にやってきたさまざまなスポーツ、特に野球とサッカーを対比してご説明いただきました。その中で、定説としては 1873 年のダグラス少佐と云々というところですが、本当に日本にサッカーが普及した出発点は東京高等師範になるということでした。そしてそのルーツに中村覚之助の存在があるというお話をいただきました。ちなみに昨年のちょうどいま頃、私も那智勝浦に 2 度目の訪問を果たしまして、筑波大学蹴球部が無事 1 部に復帰したことを覚之助のお墓に報告いたしました。

さて、本当に地域によって配置する教員を変えていたのかどうか、そのあたりまでわかるかどうかはわかりませんが、筑波大学体育専門学群長の真田久さんにお話をいただきたいと思います。真田先生は水泳部の OB ですので、蹴球部員でもあり、遊泳・水泳部員でもあった覚之助の共通の後輩であるということが言えるかもしれません。真田さん、よろしくお願いいたします。

会場には、貴重な資料が陳列された

当時のユニフォームやスパイクの復刻版も展示された。

２．嘉納校長時代の東京高師

筑波大学体育専門学群長　　真田　久

真田

筑波大学の真田久でございます。今日はサッカー殿堂入りのお二人とともに共演できることを、非常に光栄に思っております。私の方からは、東京高等師範学校の学生が日本のさまざまなスポーツの発展にも貢献したこと、東京高等師範でなぜそのようなことをするに至ったのかということ、これを嘉納校長との関係で見ていきたいと思っております。

:真田久氏

東京高等師範で嘉納が行ったこととしては、体育科を設置したこと、課外活動として様々なスポーツを奨励していたこと、そして留学生の体育やスポーツを奨励していたことが挙げられます。嘉納校長としては、日本の体育・スポーツを発展させるためには指導者が大事だと思っていたようです。指導者をどう作り、その指導者を全国に配置し、そしてそこからさまざまなスポーツを発展させていくということを考え、その中心となる体育科を作って体育専門の教師を養成し、そこから全国のスポーツの発展につなげていこうと考えていたようです。

嘉納治五郎の生い立ちはこのようになっていて、非常に様々なことをされていました。

まず、講道館柔道創設です。1882 年、まだ 20 代前半で講道館柔道を創設しました。そして 1893 年には高等師範の校長になります。当時まだ 32 歳で、いまでいう学長になったわけです。1909 年には IOC 委員。日本人初、アジア人初の IOC 委員に就任されました。そして大日本体育協会を作り、生涯スポーツとオリンピック選手を輩出し、最初にオリンピックに出場する時には団長として参加しました。

そして 1915 年、東京高等師範に体育科を設置しました。1920 年には体育科から卒業生を出し、校長を退任し、その後貴族院議員にもなり、それから 1940 年の東京招致に向けて世界を走り回り、1938 年の 5 月 4 日、海外の総会を終えて欧米の IOC 委員にお礼を言って回って、東京大会の協力の約束を取り付けたその帰り、横浜に着く 2 日前に船上でなくなられました。年齢を重ねるほど活動が活発に、国際的になっていったことが伺えます。当時の IOC 委員会でも非常に尊敬されておりました。中でも、東京高等師範の校長、元は高等師範だったのですが、1893 年から 1920 年まで、この間 2 回、途中で

やめてはいるのですが、23 年と 5 か月でしたかね、93 年から 1920 年くらいまでの間ずっと校長を務めていたということです。したがって「高師の嘉納、嘉納の高師」、こんなふうに言われていたくらいでした。

もとは第一高等中学校の校長にもなっていましたので、そちらを選ぶか高等師範を選ぶか、というときに躊躇なく高等師範の校長を選んで、その後ずっと高等師範の校長として日本の教育界を考えていったという人物であります。その中で、教育の中心に体育を据えたと。これは嘉納治五郎の最も大きな貢献だろうと思っています。

1910 年にまとめた本では、嘉納の体育・スポーツ観として以下の 3 つのことを言っています。一つ目は「筋骨発達、身体を強健にする」こと。二つ目は「自己に対し、人に対し道徳や品位の向上を図ることができる」こと。スポーツをすることで道徳的にもあるいは品位を高めることができるということです。そして三つ目が「運動の習慣、長く継続することで心身共に常に若々しく生きることができる」こと、そしてそれによって社会に貢献することができるということです。これらのことを嘉納は 1910 年、今から 106 年前に述べていました。今日の体育・スポーツの目的にそのまま置き換えても十分つながるものだろうと考えております。

体育科の設置に向けて嘉納は動いていくわけですが、ここで、金栗四三という、1908 年に東京高等師範の地理科に入り、後にオリンピックの最初の出場選手になる人がいたのですが、彼の入学時にどんなことがあったかをみていきたいと思います。彼は地理科です。体操科ではありません。しかし長距離競走が春と秋に行われておりました。だいたい 20 数キロ。東京高師の正門を出て、大宮とか池上本門寺とかまで走っていたというわけです。学生は全員必修、教職員も走っていたようで、嘉納校長も自ら何回か走っていました。そして水泳実習も夏に 2 週間、千葉県の館山で行われていました。今でも館山は筑波大学が水泳実習をやっていますが、実は水泳実習を始めたのは嘉納治五郎です。1 年生全員、体育の学生以外も全員 2 週間、合宿をして水泳実習を行いました。泳げる者は十里遠泳ということで、そのまま換算しますと約 40 キロになりますが、朝泳いで夕方まで泳ぎ続けるというようなこともありました。そして大運動会、これも教職員、学生全員参加の運動会でありました。これが秋に行われ、そして柔道か剣道どちらか必ず履修するということになり、さらに「放課後には運動部に所属して練習をせよ」ということが入学したときの校長の言葉であったと言うことです。ですから、東京高等師範学校は当時最もスポーツが盛んな学校であり、スポーツができなければさぞかしつらい学生生活だったのではないかと思います。

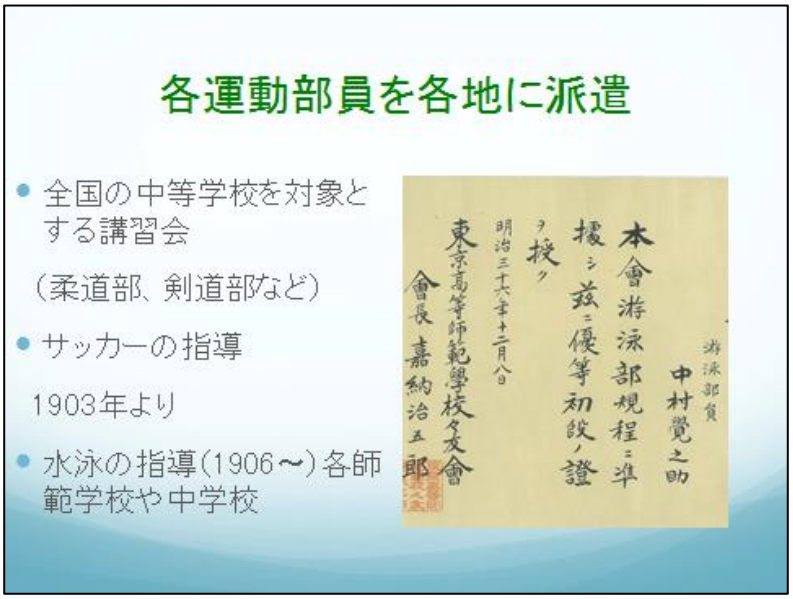
特に、長距離走と水泳を普及させました。これらは日本人にとって最もなじみの深いスポーツで、男女、年齢に関係なく、お金のあるなしに関係なく、さらに運動のうまい下手に関わらず誰でもできる。これをぜひとも日本全国に普及させたいということで、東京高師の学生に競走ということから始まり、水泳実習を必修にし、さらに高師泳法という泳ぎまで作ってしまいました。いわゆる横泳ぎですが、これは附属中の方でもやりまして、こちらは水府流太田派の泳法として伝わっていますが、もともとは高師泳法でした。これが全国に広まっていくことになります。今日でも水泳と長距離走は、日本人が大好きな実施するスポーツのベスト 5 に必ず入っています。

そして体操科を設置します。1899 年に修業年限 2 年の体操専修科を、1902 年には修身体操専修科を設置します。しかし修業年限 2 年ではなかなか優秀な教師が集まりません。ほかの教科は修業年限 3 年でした。1 年少ないということはそれだけ給料が安く、社会的立場も低くなりますので、いい教師が集まらなかったのです。この状況をなんとか引き上げたいと嘉納は考え、1902 年、なんとか修業年限 2 年 7 か月にしたのですが、それでもやはり他の教科と同等にしたいということで、他の教科が 4 年のコースになった時に文科兼修体操専修科、つまり体操以外にもう一教科の免許をとれるということで 4 年にしました。体操以外ですと国語漢文、英語、あるいは地理歴史の教員免許も取らせることで、何とか 4 年になるわけです。しかし他の教科の免許を取るとやはり体操科に優秀な教師が残らな

いということで、1913 年にはそれをまた 3 年に戻して体操専修科としました。3 年に戻してかなり専門的な教育を受けさせるわけですが、その時言ったことが、「技術の発達を図るだけでなく、よくその理論を解し、今日の進歩した方法を会得せしめる」ということでした。つまりスポーツの技能、技術と理論の両方をきちんと会得した指導者を育てていこうと嘉納は考え、3 年のコースを文部省に認めさせたのです。このコースを 2 年間やって実績を作り、1915 年にいよいよ修業年限 4 年にしました。4 年の体育科のプログラムを作り、それを文部省に交渉し、他の教科と同等にするべきだということで修業年限 4 年のコースを作ったのです。それが 1915 年ですので、いまから 101 年前ということになります。この時に修身教育学、体操教練、競技、柔道、剣道、体育理論、それから解剖、生理、衛生、および救急療法、スポーツ医学などでしょうか、新たに心理学とか論理学、それから歴史学ですね、こうしたものを入れて、これが体育学なのだということを文部省に認めさせたということです。

1915 年以降、東京高等師範は文科と理科の 2 つの学科だったところに体育科が加わり、文科、理科、体育科の 3 つの学科ができました。これは画期的なことで、文科、理科と同等の立場としての体育科を作りました。ここを出た教員は、他の教科と同等の社会的な地位を得ますし校長にもなれるということで、優秀な人材を集めていくことが可能になりました。これが、今日でも小中高で体育が必修で、なおかつほとんどの大学で体育の授業が設置されているゆえんです。これは世界でも稀にみる体育のコースで、こうした体育科を作って、指導者を全国に派遣していくことになりました。

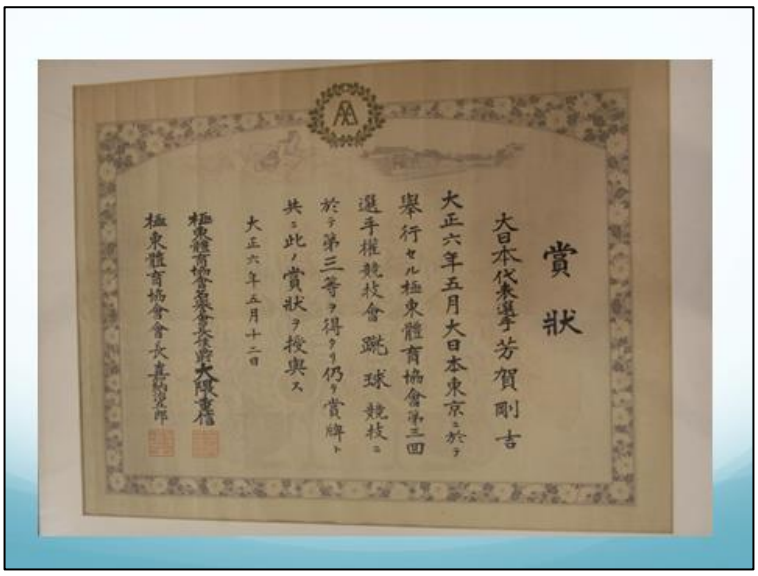
次に課外活動の奨励です。これは単に体育の専門の教師だけではなくて、運動会を作り、校友会を作っていろんな部を作っていくわけですが、これには 3 つの目的がありました。一つ目は「主体的な活動により将来の指導方法を身につけること」です。校友会など学生が主体的に運営をさせる活動は、指導者となるための方法として非常によろしいと、嘉納は考えていました。二つ目は「子どもたち、生徒たちに指導をするときに、身体上優越を感ずること」。これが非常に大事なのだと嘉納は考えていました。身体的な優越さ、得意なことを見せることで、子どもたちが自分の指導に対してきちんと聞いてくれるようになるということです。三つ目は「生徒を指導する際、体育と結び付けて行うと良い」。例を挙げると、生活上の指導をするときには、教室で生徒を呼びつけるよりも、運動をする中で一緒に反省した方が効果が高いということです。これはおそらく嘉納自身の経験から来たものだろうと思うのですが、これらの理由から、嘉納は課外活動を奨励していきました。さらに、体育やスポーツを全国レベルで普及させていくためには、体育専門の学生だけでなく、高等師範すべての学生に経験させて、指導者としていろんな教科の先生となった時に課外活動に触れてもらってスポーツを全国に広めていきたいと考えていました。



これは中村覚之助大先輩の賞状ですね。遊泳部員と書いてありますが。

全国の中等学校を対象とする文部科学省主催の講習会を、東京高等師範が全部請け負って実施していきます。例えば柔道や剣道、蹴球、水泳などについての講習会をやる時に、全国から各府県代表の教員が集まってきて、高等師範の講習会を受けて戻していくという仕組みでした。その時に運動部員がいろいろとサポー

トしております。それから全国の地方にも派遣されており、サッカーの指導は、私の調査では 1903 年から、水泳も 1906 年から全国の中学校や師範学校に呼ばれて、学生がそこに行って教えていたようです。「高等師範ではこのような水泳をやっています」ということを伝えに行くわけです。そのようなことをやっていると、その中学校だけでなくて、県のさまざまな教員がその中学校に集まってそれを聞きに来るということでありました。水泳の場合には二級をとると教えにいってもよいということになっており、二級というのが一つの目安となっていました。この中村覚之助さんは初段をとっておられましたから、全国はおろか、中国にも出かけていたということです。その中で様々な運動部が活躍していくわけで。


賞狀

大日本代表學芳賀剛吉

大正六年五月大日本東京ニ於テ
擧行セル極東體育協會第三四
選手權競技會蹴球競技ニ
於テ第三等ヲ得タリ仍テ賞牌ト
共ニ此ノ賞狀ヲ授與ス

大正六年五月十二日

極東體育協會擧會長侯爵大隈重信

極東體育協會會長嘉納治五郎

これは非常に珍しい賞状であります。中塚先生のスライドにも出てきますが、芳賀剛吉という方は高等師範の蹴球部メンバーです。大正 6（1917）年、大日本東京において、「極東体育協会第 3 回極東選手権の蹴球競技において三等を得たり」と書いてあり、こちらはその賞状ということになります。この賞状には「極東体育教練名誉会長侯爵大隈重信」そして「極東体育協会会長嘉納治五郎」ということで、大隈と嘉納二人並んで賞状に名前が入っており、非常に珍しい賞状であります。しかもこれには二人の英語の印鑑が押されてあります。こういうことを通して様々なスポーツの普及、発展に深くかかわっていたわけです。

留学生についてですが、清国から政府の留学生が派遣されてまいりました。日清戦争で清国が日本に敗れました。清国としては「なぜ日本に敗れたのか、それは近代化に遅れたためだ、近代化を成功させている日本に学ぼう」ということで、優秀な学生を政府派遣留学生として日本に派遣しました。

それを嘉納治五郎が受け入れたのですが、急に大学には入れないので、宏文学院という学校を作って、そこで日本のことをいろいろと知り、日本の教育のレベルに追いつかせたうえで、日本の他の大学や高等師範に進ませるという方法をとりました。この宏文学院では留学生 7,192 人を受け入れ、3,810 人を卒業させています。優秀な子はもちろん高等師範にも入ってきております。今から 100 年以上も前のことです。留学生をこんなにも受け入れるというのはさぞかし大変だったようで、このおかげで嘉納治五郎は莫大な借金を抱えることにもなります。自然科学を重視した教育をし、日本語と日本文化の授業を行い、課外講義、名所旧跡への遠足なども行っていました。遠足は長距離走にも繋がっていくわけです。

留学生の中には著名な人もおりました。のちの辛亥革命の火付け役となった魯迅も嘉納治五郎のもとで学び、この宏文学院で学びました。当時満州族がしていた辮髪という後ろ髪を切ってしまいました。つまり、古い中国との決別をこの宏文学院で図ったことが伺えます。そのあと東北医学専門学校へ行き、中国へ戻るわけですが、その後、彼が辛亥革命の始まりとなる時には、この宏文学院での生活が大きかったのではないかと思います。

この他にも非常に著名な人がいまして、例えば楊昌済という人が挙げられます。彼は宏文学院を出た後、嘉納の勧めで高等師範に入学して教育学を学び、その後スコットランドに留学しました。それらを通して「教育によって中国をなんとか改革しなくてはいけない」という思いに至るわけです。こ

れはまさに嘉納治五郎の考えそのものなのですが、楊昌済は 1913 年、中国へ戻って湖南第一師範学校の教員をしていたころ、毛沢東と出会います。毛沢東は楊昌済を自分の師匠と仰ぐようになり、その後楊昌済の娘と結婚されたということなので、嘉納の教えは実は毛沢東にも影響を与えていたとのではないかと思います。

そして、范源濂（ハンゲンレン）という人は東京高等師範の英語科で学び、その後宏文学院の講義の通訳者となりました、非常に優秀だったことがわかります。中華民国に戻った後は 3 回にわたり教育総長、日本で言う文部大臣として教育制度の整備をしますが、この教育制度が日本の制度に非常によく似ています。高等師範学校も作ることになりました。1923 年から 20 年間、北京師範大の学長にもなり、同大の校歌の作詞も范源濂が行っています。今でも北京師範大は重点大学の一つで、非常に発展している大学です。北京師範大の学長、北京師範大を作ったのは嘉納治五郎の弟子であるということが言えるわけです。

さらに、田漢という人が英語科に留学していたのですが、彼は卒業後に義勇軍進行曲を作り、その詩が国歌に選定されました。今でもこの詩が使われていますので、中国代表がオリンピックでたくさん金メダルを取って国歌が流れるとき、その詩は実は東京高師の卒業生が作ったということでもあります。

留学生の中でも、体育、特に蹴球は盛んでありました。1909 年、蹴球部大会留学生紅白戦が行われております。1910 年には、清国留学生チーム vs 豊島師範の蹴球試合が行われております。1910 年にも、1 月と 11 月には東京高師蹴球部大会で留学生 22 名が紅白戦を行いました。6 月と 11 月には留学生 vs 豊島師範の試合が行われ、1 勝 1 敗であったという記録が残っています。留学生蹴球部員の卒業後を調べてみたところ、当時 GK をやっていた人が福建省の師範事務主任になっていたり、北京大学の教授になっていたり、人類学の本を出していたり、大学教授になっていたりと、蹴球部の卒業生が中国でも活躍していることがわかります。参議院議員にもなっていました。それから通訳者、山東大の教授などなど、いろいろと活躍をしていました。

当時の校友会史を見てみますと、留学生に向けて、日本の高師の学生がこんなエールを送っています。「留学の当初は身体操縦不自由なりしが、不屈なる精神と熱心なる練習が大いにその効果を表し、今や邦人に比して遜色なしに至れり。学なり錦を故郷に飾るの日、体育界にもまた施すところあらんことを希望してやまざるなり」。学を修めて祖国に戻った時に、中国のスポーツ界の発展にも寄与してもらいたいというエールを日本の学生が送っていたわけです。これが 1909 年でありますから、嘉納治五郎のもとで国籍に関係なくスポーツをやり、それを日本の各地はもとより、中国に戻ってもおそらくやっていたのだろうと思うわけであります。

以上で終わります。

中塚

どうもありがとうございました。「高師の嘉納、嘉納の高師」。嘉納が校長を務めておられた 1920 年くらいのところを振り返っていただきました。実は中村覚之助さんのシンポジウムをやった時にもご登壇いただいた真田さんから、高師のサッカー部に中国人や韓国人のサッカーチームがあって活躍していたという話をはじめてお聞きして、我々も自分たちの母校でありながらそういうことを知らなかったのを恥じるとともに、とても誇りにも思った次第です。

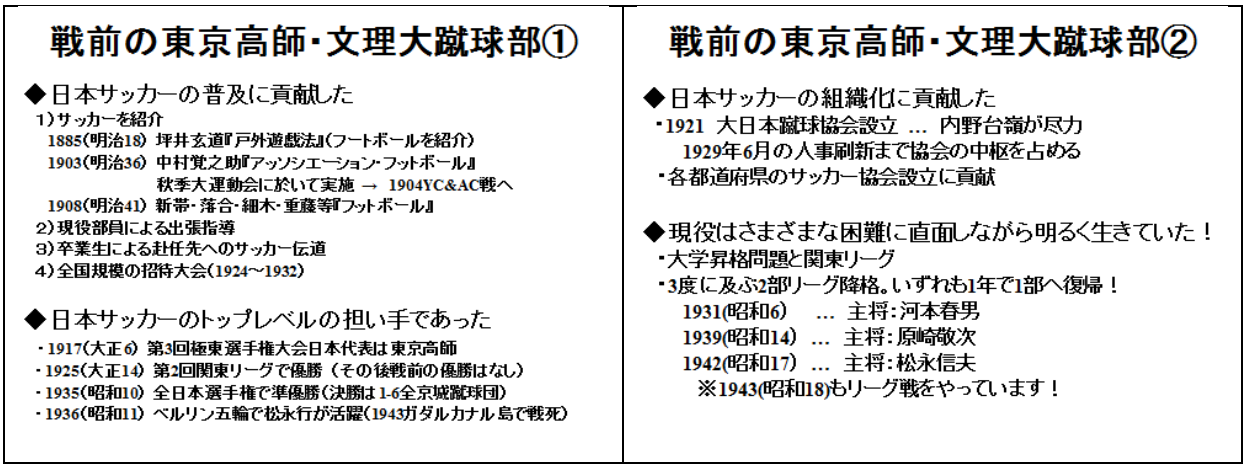
お手許の資料に年表があります。 7 ページまでのところが、いま牛木さん、真田さんにお話しいただいたところで、1915 年、20 年よりちょっと前くらいのところですね。一番右端の行を見てもらいますと 1915 年 1 月、東京高師留学生チームが埼玉師範に 2-0 で勝利というのがあります。はじめのころは動きもぎこちなかった留学生たちも、一所懸命フットボールをやって埼玉師範に勝つぐらいになっているということがこの記録からもわかると思います。

３．東京高師の日本サッカーへの貢献

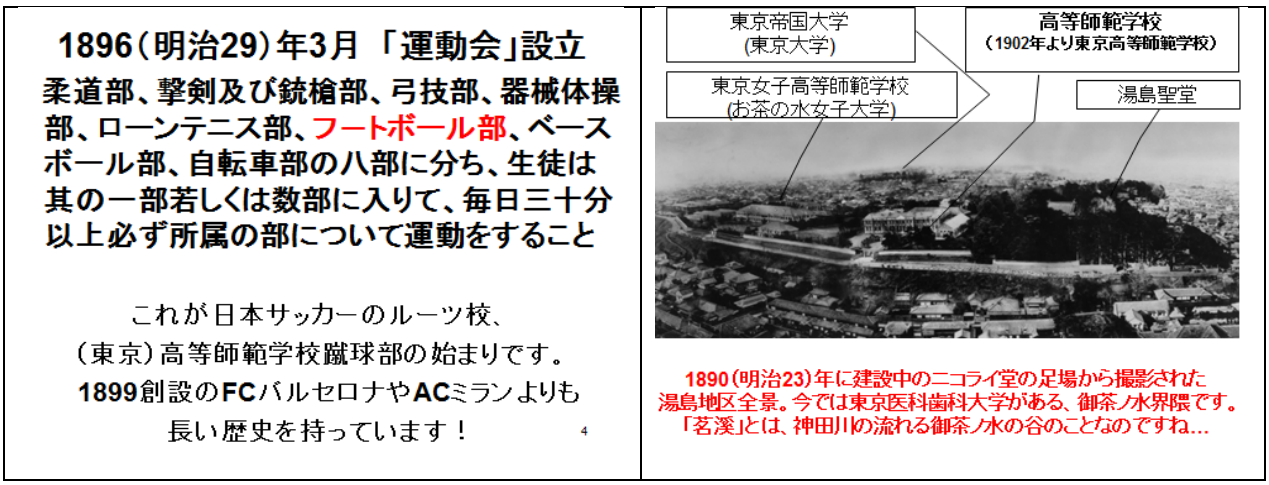
筑波大学附属高校　　中塚義実

中塚

さてそれではもう一度スライドの方を見ていただきまして、第１部の残りの時間を使って、私の方でもう一度最初のところからざっと振り返りつつ、この年表で言うと８ページのところまでを、いろんなエピソードを交え、そのエピソードに関しては賀川浩さんにコメントをいただきながら進めてまいりたいと思います。



大戦前の高師、文理大、蹴球部の特徴と、同校の卒業生が日本のサッカー、スポーツに対してどのような貢献をしたのかをざっくりとイメージでつかんでください。まずは日本サッカーの普及に貢献します。牛木さんや真田さんの話でも紹介されました。そして、先ほども日本代表の話がありましたが、東京高等師範は日本サッカーのトップレベルの担い手でした。高師しかサッカーやっていなかったのですから当然です。それから、日本サッカーの組織化への貢献があります。大日本蹴球協会の創設に貢献している。さらに現役部員はさまざまな困難に直面しながらも明るく生きていた様子が、さまざまなエピソードからうかがえます。このあたりをもう少し詳しくみていきたいと思います。



出発点は嘉納校長時代の運動会設立です。放課後の部活動のはじまりです。ただ、運動会と言っていたころの学生は、「一部もしくは数部に入りて、毎日 30 分以上、必ず所属の部について運動をすること」ですので、特定の部に所属してメンバーシップで一つのことを究めるものとは少し違う気がし

ます。場所は、いまの東京医科歯科大学がある御茶ノ水駅の向かい側のあたりです。筑波大学の同窓会は「茗渓会」と言いますが、とてもきれいな水の流れている谷のことを指しています。それは神田川のことなのですね。あの頃はきれいだったようです。

その後少しずつ、今のようなメンバーシップの部活動になっていきます。運動会と寄宿舎、それといわゆる文化系の部などがくっついた形で校友会が設立され、嘉納校長自ら校友会の会長を務めました。その中にフートボール部があります。1904 年からはフートボール部は蹴球部と名前が変わり、大塚へ移転します。大塚に新校舎を建設していたころ、海外視察に行っていた坪井玄道が帰国します。

先ほどもちょっと見ましたが、大塚の新校舎予定地は雑木雑草に覆われていたが「中村君以下部員一同整地に努め」「中村君から蹴球に関する運動規約を習って」、すなわち坪井玄道が持ち帰った英文を訳したものを覚之助がまとめていくわけです。そして大塚窪町に移転します。東京教育大学があったところですが、そこで日本人初の対外試合へ向けての練習を行います。

茗荷谷の駅から来られた方は、道路を渡ってすぐに、放送大学と筑波大学東京キャンパスが一緒になっているところがあります。この奥の原っぱが、「中村君以下部員一同整地に努め」たグラウンドで、文京区スポーツセンターの前に広がっているわけです。ただし現在は、「この自由広場ではゴルフ・サッカー・野球等の球技はやめましょう」となっています。

1901（明治34）年10月「校友会」設立

「運動会及び生徒の寄合会を合併して之を校友会と名づけ、会の目的を定めて、精神を修養し身体を鍛錬し、以て校風を振作し兼ねて会員相互の親睦を厚くするに在りとし本校生徒を正会員、校長・教官等を特別会員（後、賛助会員と改称す）とし、此の目的を達せんが為に談話部、雑誌部、柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操部（後廃す）、ローンテニス部、フートボール部、ボート部、自転車部（後廃す）の11部を設け、正会員は必ず柔道以下の一部以上に入って運動をなすべきこととした。翌年度に遊泳部及び徒歩部が置かれた」

（東京文理科大学、東京高等師範学校『創立六十年』）

1903（明治36）年4月　大塚へ移転

- 明治35（1902）年4月　坪井玄道が欧米視察から帰国
  5月頃　大塚に新校舎建設中

「全生徒は35年5月、一足先にできた寄宿舎に入舎して、そこから1年間お茶の水に通った。大塚の新運動場の予定地は雑木雑草に埋められていたが、中村君以下部員一同整地に努め、蹴球のフィールドに棕櫚縄（しゅろなわ）を張りめぐらして石灰線の代用としたり、ゴールを建てたりした。一方中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した」（堀桑吉氏の寄稿より）

- 明治36（1903）年4月　大塚窪町に移転（茗荷谷駅前。東京教育大学があったところ。現筑波大学東京キャンパス）
- 明治37（1904）年2月　日本人初の対外試合（YC&AC戦）

1904 年 2 月 6 日、東京高師と YC&AC の試合翌日の写真（前掲）の後列右から 2 人目が中村覚之助です。覚之助自身は試合のマネジメントはしたけれども、この試合ではプレーしなかったようです。

ここからは、この試合のあとどのようなことがあったのかを詳しくみていきます。

覚之助はこの年の 3 月に卒業しますが、金沢四高からデハビランドという英語の先生がやってきます。スコットランド出身のこの先生は部員と一緒にプレーし、少しずつレベルアップしたようです。金沢四高出身の学生がデハビランド先生を訪ねて一緒にサッカーをしたという記録も残っています。

牛木さん、このデハビランドという人についてコメントいただけますか？

現役部員による普及活動

- 1904（明治37）年12月10日　金沢四高出身の大学生、曾てデハヴィランド氏に技を学べるもの数名来たりてマッチ的ゲームを行う
- 1906年1月29日　選手4名栃木師範・群馬師範に向う
- 1906年6月9日　部員14名青山師範に向う
- 　　早稲田中学より見学に来る
- 1906年12月9日　慈恵医院医学校生徒とゲームを行う
- 1907（明治40）年4月27日　広島高等師範学校幹事広瀬為四郎氏来校。希望によりゲームを見せる
- 1907年6月1日　青山師範と練習マッチを行う
- 1907年11月16日　青山師範対本校試合。我国人の対抗フットボールの嚆矢なり。パス巧みにして8対1で勝つ

牛木

金沢の旧制高等学校には、今の年齢にして中学 1 年から高校 1、2 年くらいまでの生徒が入ってきました。このデハビランドという人は、そこでサッカーの授業を教えて、雪の降る日にもやっていたということが、僕の知っている本に書いてありました。デハビランドはその後東京高師の先生になり、四高で教えた学生たちは当時の東京帝国大学に入って、デハビランドさんも交えて東京高師で試合をしたという記録があります。

このデハビランドさんという方はいろんなことをやっていました。例えば囲碁です。囲碁、将棋について英語で本を書いたりもしています。そして非常に美人のイングランド人女性と結婚していたのですが、日本人の女中さんに手を出してしまったので奥さんの方は怒って帰ってしまいました。その時に娘も連れて帰ってしまったようです。

お母さんが美人だったものですから娘さんも美人だったらしくて、二人の娘さんはそれぞれハリウッドで女優になりました。一人はオリビア、もう一人はジョーン・フォンテインという名前です。姉妹でアカデミー女優主演賞を取ったのはデハビランドさんの娘二人だけだったそうです。娘が女優になり、大スターになった時にはハリウッドまで会いに行こうとしたのですが、やっぱり奥さんは許してくれなかったというような話をしていました。僕は英語がそんなにできるわけではありませんが、このデハビランドさんの英語のこの本は多少わかりました。非常に器用な人だったそうです。

中塚

ありがとうございます。先ほども真田さんの話にありましたが、文部省の授業かどうかはさておき、日本各地へ現役部員が出向いていくわけです。栃木師範、群馬師範、青山師範、逆に見学に来ることもありました。繰り返しますが、見学に来る場所は茗荷谷駅前にある、いまの筑波大学東京キャンパスのあたりです。このように少しずつサッカーが広まっていきました。

また、卒業生が広島からわざわざ高師までやってきて、蹴球をやっているところを見て、広島に来てもらえる人材をリクルートすることもありました。当時は校長が人事権を持っていたのかもしれません。高師出身の校長先生が高師蹴球部出身者を自分の学校に連れてくることがよくあったようです。1907 年の青山師範との試合が日本人同士の最初のサッカー試合であると JFA の HP に書かれています。

書籍を通しての紹介	書籍を通しての紹介
・1885（明治18）　坪井玄道 『戸外遊戯法』（サッカーを紹介） ・1903（明治36）　中村覚之助 『アッソシエーション・フットボール』（初のサッカー専門書） ・1908（明治41）新帯國太郎・落合秀保・細木志朗・重藤省一 『フットボール』（実践経験を通して前書を全面改訂） ・1920（大正9）年　『アッソシエーション・フットボール』 「前年卒業の田村二郎君から、初心者向きの指導書を書いたからこれに手を入れて部から出してほしいという申し入れがありまして、いちおう苦心の作とは見受けられましたが、少々の手入れ程度の修正では部から出すことはできないというのが部員全体の一致した意見だったので、みんなで改めて想を練り直し、分担を決めて執筆にとりかかりました。	「（続き）有り難いことに小澤準作君という英語科切っての秀才がいて、本場イギリスの指導書からよい知恵をたくさん借用してくれましたし、それに加えて、その夏、兵庫県の御影師範から、ぜひ御指導をという招請があり、全チームそろって御影に出かけ、寄宿舎に寝泊まりして、5日ばかり実技の指導に当りましたが、これがわれわれにとっても合宿という形になり、この事が指導書編集上に大きなプラスになってくれました」『東京教育大学サッカー部史』より 大正9（1920）年度主将 和田邦五郎（御影師範卒→東京高師卒 →東京高師附中に赴任（国語）

書籍を通しての普及もありました。坪井玄道さんの書籍や、中村覚之助の発刊した日本初のサッカー専門書『アッソシエーションフットボール』もありました。しかし 1903 年に発刊されたこの本は、まだちゃんとサッカーをやっていない段階で書かれたものです。その後 YC＆AC との試合や練習を通して、落合さんや細木さん、重藤さんといった人たちが前の本の改訂版を書きます。これが『フットボール』という本です。

その次、1920 年の『アッソシエーションフットボール』は、私はまだみたことないのですが、嘉納校長が退任されるくらいのタイミングで発刊されました。ありがたいことに、英語科きっての秀才が、本場イギリスの指導書から良い知恵をたくさん借用してくれたようです。それに加え、その夏には兵庫県の御影師範から是非ご指導をという招請があり、全チームそろって御影に出かけて 5 日ばかりの実技指導にあたったこともありました。これが指導書を作るうえで大いにプラスになったようです。

これを書かれたのは、この年度の主将であった和田邦五郎さんです。このお名前に反応された小栗さんがこちらにいらっしゃいます。和田さんは御影師範を卒業して東京高師で主将を務め、卒業後は東京高師附属中に国語の教師として着任された方で、附属中サッカー部の初代部長です。あとでコメントいただこうかと思っていたのですが、小栗さんがなんだかすごく喋りたそうにされているので、ちょっと一言お願いします。

小栗純二（桐窓サッカー倶楽部※元会長）　※東京高師附属中～筑波大学附属高サッカー部同窓会

はい、すみません。わたくし昭和 15 年に附属中に入って、その時のサッカー部の部長が和田先生でした。学生時代からサッカーなさっていたということは聞きました。

中塚

東京高師附属中サッカー部の初代部長ですよね。

小栗

はい、そうですね。

中塚

ありがとうございます。こういったつながりもあります。そんなわけで和田邦五郎さんは卒業後も、茗荷谷周辺の学校に赴任されたわけです。東京高師の卒業生は師範学校や旧制中学校など、全国各地に赴任してサッカーを広めていったようです。

高橋秀治さんは、日立におられた高橋英辰（ヒデトキ）さんのお父さんで、刈谷のサッカーのルーツとなっています。玉井幸助さんは御影師範に、賀川さんの母校の神戸一中には河本春男さんが赴任されています。もっとも河本さんの着任前から神戸一中のサッカー部はありました。

ではここで賀川さんに、神戸サッカーの始まり、特に御影師範や神戸一中のところについてお話しいただければと思います。

卒業後は全国各地へ！

明37(1904)　中村 覚之助→清国山東省済南府師範学堂
明39(1906)　堀　桑吉　→　愛知第一師範
明41(1908)　細木 志郎　→　埼玉師範
明41(1908)　牧野 信寿　→　広島師範
明41(1908)　内野 台嶺　→　豊島師範
明42(1909)　落合 秀保　→　滋賀師範
明42(1909)　玉井 幸助　→　御影師範
明44(1911)　松本 寛次　→　広島一中
大3(1914)　高橋 英治　→　刈谷中
大9(1920)　北村 春吉　→　静岡師範
昭7(1932)　河本 春男　→　神戸一中

「赴任地にゴールポスト！」を合言葉に、全国にサッカーを広めた東京高師は、「日本サッカーの宗家」です

４．戦前の日本サッカーの思い出

スポーツジャーナリスト　賀川　浩

１）神戸一中と河本春男先生

賀川

神戸一中には昭和 12 年に入学し、17 年に卒業しました。河本春男先生は、昭和 7 年に、サッカー部の部長をぜひ欲しいということで池田多助という校長先生が直々に東京高等師範に出向いてその時のキャプテンの河本さんをもらいに来たようです。河本先生は刈谷中学の時に、神戸一中と試合をして勝利したことがあります。河本先生はその時の刈谷のキャプテンだったのだと思います。河本先生はサッカーも上手だったし、キャプテンシーもあったそうですから、池田校長が惚れ込んで連れていきました。そのころはそういったことが校長先生の権限でできたわけです。

:中塚義実氏（左）と賀川氏氏（右）

私どもは中学校の時に河本先生にサッカーを習いました。先生は当時、我が家の隣の家の二階に下宿しておられたのですが、我が家にも時々ご飯を食べに来られたことがありました。それまで私の兄の賀川太郎は神戸の小学校では名の売れたピッチャーで、別所毅彦と張り合っていたほどでした。その野球少年であった賀川太郎も、河本先生が隣に来たおかげでサッカーに転向し、のちにサッカーの日本代表選手になります。賀川家は河本先生とは切っても切れない縁があります。とにかく指導者として非常に優秀な方でした。昭和 14 年には、岡山の女子師範学校が学校の空気を立て直すためということで、校長先生が直談判に来て、河本さんを連れていくということになりました。その年全国大会で優勝するつもりだった賀川太郎のチームは 2 回戦で負けました。そのあと気を取り直して全国大会で優勝しましたが、やはり優秀な指導者がいるということはどれだけ大きいかということを、私はそのときに身に染みて感じました。

中塚

河本先生は終戦後、ご縁があってユーハイムの社長として会社の経営に携わることになります。

賀川

これもサッカーに多少縁があるのですが、第一次世界大戦で中国の青島（チンタオ）を日本が攻略して、そこからたくさんのドイツ人が第一次世界大戦中に日本へ捕虜としてやってきまして、捕虜収容所へ入りました。バウムクーヘンや、ハム、ソーセージなどのドイツ文化は、広島や各地のドイツ人捕虜収容所を通して日本に持ち込まれました。その文化のひとつにサッカーがあったわけです。広島の高等師範や中学校の生徒が広島の似島の捕虜収容所にサッカーを習いに行ったわけです。捕虜収容所にはたくさんの元気なドイツ人がいます。元気なドイツ人が何百人もおれば、サッカーのいいチームが一つや二つはできる。神戸外人クラブの社会人のサッカーとは違い、軍人ですからみな若くてうまい。西日本で広島のサッカーが強くなったのは、捕虜収容所と関係があります。

河本春男先生は、西日本でサッカーが盛んになり、神戸一中は昭和 5 年に 2 回目の優勝をしたころに東京高師から赴任され、神戸一中のサッカーが確立していきました。個人としてはサッカーのコーチとして成功し、第二の人生ではユーハイムのあとをついで、全国的な大きな洋菓子のメーカーに成長させました。

中塚
　ユーハイムということで言えば、いま筑波大学の若手優秀研究者にユーハイムから賞が出ているとお聞きしています。真田さん、そのあたりをご紹介いただけますか。

真田
　河本賞といいまして、河本さんから基金を出していただきまして、若手の研究奨励賞として毎年いただいています。そのときに毎回、河本春男さんの息子さん、この方も東京教育大のご出身なのですが、その方に来ていただいて、当時の思い出と、教育大で学んだことを活かして経営されているというお話を伺っています。

２）サッカーの技術を伝えたチョウディン

中塚
　1922 年当時の大学生のリーグ戦の状況です。高師、帝大、東京商大、早稲田の 4 校でリーグをやろうということになり、大正 13 年、関東大震災の翌年に、秋よりリーグ戦を行うべく、1 部 2 部のリーグ戦がスタートします。初年度優勝は早稲田大学。この優勝の背景にはビルマ人チョー･ディンの指導があるそうです。
　ここでまた賀川さんに話をお聞きしたいのですが、チョー・ディンさん、日本にサッカーの技術を伝えたビルマ人のことをご紹介いただけますか。

ア式蹴球コレッジリーグ

1922(大正11)年、「東京高師、東京帝大、東京商大、早稲田高等学院の4校で大学専門学校リーグを結成、翌年のア式蹴球コレッジリーグ発足のきっかけとなった」。大正12年度は「不完全ながら帝大首唱の下にリーグ戦を行ふ」。
　そして翌大正13(1924)年秋よりリーグ戦を行うべく各学校を勧誘し、規約を定め、開始した。
(第一部)帝大、慶應、早大、高師、農大、法大
(第二部)明大、商大、外語、青学、東歯、一高
　初年度優勝は早稲田大学である。この優勝は、ビルマ人チョウ・ディンの指導を受けた、第1回旧制高校インターハイ(1923年)優勝の早稲田高等学院(予科)から含めて6年間一貫でチーム作りをした成果であると言える。
『あのひと、あのとき－エピソードで綴る筑波大学蹴球部の120年』より

賀川
　チョー・ディンさんはビルマの人で、写真を見るとすらっとして背が高い人ですね。ご存知の通りサッカーの発祥の地はイングランドです。しかし当時いろいろな社会情勢もあって、アジアにはスコットランド人やアイルランド人系の人が働きに来ていました。チョー・ディンさんも、ビルマに働きに来ていたスコットランド人にサッカーを習ったのではないかと思います。チョー・ディンが自分で書いた『How to play football』という技術書の頭に、「そもそもフットボールはスコットランドで生まれたものだ」と書いてあるくらいです。スコットランド人にサッカーを習ったので、どちらかというとショートパスが好きなようでした。
　神戸一中の先輩がチョー・ディンに半日だけ習ったことがあるのですが、そのときの話を聞いたことがあります。チョー・ディンさんと出会うまでは、日本人の指導者は「しっかり蹴れ」と言うだけで、「足のどの部分で蹴ればよいか」というようなことは誰も教えてくれませんでした。しかしチョー・ディンは、インサイドキック・アウトサイドキックというようなキックの種類があることを教えてくれたそうです。先輩方はそれまでのサッカーの技術に対する疑問が解決したと言っておりました。
　神戸一中のみならず、チョー・ディンさんは全国を行脚して日本のサッカーのレベルアップに努めてこられました。御影師範学校はチョー・ディンを 1 週間招いたそうです。神戸一中はお金がないものですからチョー・ディンさんに直接来てくれとは言えなくて、先輩が「宝塚の歌劇を観に連れて行くから」と引っ張り出しました。そしてみんなで宝塚の松林のところでボールを持って待っていました。それを見たチョー･ディンさんもサッカーが好きなので、一緒になってボール蹴ってくれました。

これが神戸一中のサッカーの技術のレベルアップに大きくつながって、のちに全国の技術のレベルアップにもつながったと思います。

チョー・ディン（左）
右は彼に学んだ早稲田高等学院の鈴木重義
出典：日本サッカーアーカイブ
（http://archive.footballjapan.jp/index.html）

中塚
　資料の 15 ページに、附属 24 回卒の新田純興さんが書かれている文章があります。「大正 12 年の大地震の頃、当時ビルマの留学生と付き合うチャンスがあり、サッカーのコーチを受けることができました。その頃ビルマは英国の植民地でした。チョー・ディン君と、モンエフペー君の 2 人に直接コーチを受けられたことは云々…」とあります。
　神戸一中の子たちは宝塚に行く途中のチョー・ディンさんを待ち伏せて半日だけトレーニングを受けたのかもしれないですが、附属の子はほとんど毎日といって良いくらい指導を受けていたのですね。

賀川
　贅沢な話ですね。

中塚
　別の記事によりますと、チョー・ディンさんをはじめビルマの大学生たちはいまの東京工業大学の留学生で、神楽坂のあたりに下宿していたようです。日本に来たけれど誰もサッカーをしていないので寂しい思いをしていたあるとき、この辺りを通りかかったら高等師範のグラウンドでボールを蹴っている学生の姿を目にしました。彼らがあまりにも下手くそなのでやり方を教えてあげて、そこから始まったということです。その後、早稲田高等学院でも指導されて、第 1 回インターハイに優勝するんですよね。

賀川
　そうですね。早稲田高等学院。たしかチョー・ディンは走り高跳びの選手でもあって、陸上競技の選手と一緒に練習しようと早稲田のグラウンドに行ったそうです。すると学生がサッカーの練習をしていたのですが、あまりにも下手なので「教えてやろう」という気になったと聞いております。

中塚
　ちょうど関東大震災でチョー・ディンさんが留学していた学校の校舎が崩れ、授業ができなくなったこともあり、その期間に全国の行脚が始まったのですね。

３）朝鮮半島へのライバル意識

中塚
　資料の 14 ページに、お正月の高校サッカーの第 1 回から戦後すぐまでの優勝校と大会出場校を載せたものがあります。関西大会であった日本フートボール大会は、第 7 回まで御影師範が連続優勝です。第 8 回大会で神戸一中が初めて優勝しています。第 9 回からは全国からチームが参加し、第 10 回大会では平壌の学校が、そして戦前最後の大会では普成中、ソウルの学校が優勝しています。朝鮮

半島の学校とのしのぎ合いは、神戸一中の賀川さんの、プレーヤーとしての思い入れとしてかなりあったのではないでしょうか。

賀川

朝鮮半島から来るチームは年度によって、夏休みに試験が増えるなどの理由でときたま来ないことがありましたが、朝鮮半島で予選を行い、日本で行われる毎日新聞主催の全国大会に参加していました。出場すると、必ず優勝候補です。当時はご存知のように、強いチームというのは大半が師範学校です。東京でいえば青山師範。それが学校の制度上、師範学校というのは高等小学校から 2 年在籍した上でさらに5年間おりますから､最上級生になると5年制の中学と比べると年齢がふたつ違います。青年期で年齢がふたつ違うということは体力や体格が違うので、師範学校にいかにして勝つかは神戸一中の大きな課題でした。

賀川浩氏

それと同じように、朝鮮半島からくるチームの圧倒的な強さを、我々はいやというほど思い知りました。

僕が 5 年生のとき、明治神宮大会に出場しました。大戦が近づいている影響で、いまの全国高校大会が中止になったのですが、神宮大会は開催されたのです。1 回戦が熊本師範、準決勝が青山師範でした。このとき青山師範はものすごく強かったです。後に東京教育大の監督となる太田哲夫さんがそのときセンターハーフで僕のマークをしていました。この試合に私たちはなんとか勝利をし、決勝は普成中と試合をしました。スコアは 2 対 2 の引き分けで、延長戦をやらせてもらえず双方優勝という結果になりました。こちらは 2 対 0 で勝っていたのを追いつかれたので、非常に悔しい思いをしたことを覚えています。

中塚

ありがとうございます。いまのお話は 1930 年代終わり、1940 年代のお話でしょうか

賀川

そうですね、昭和 16 年…戦争が始まる 1 ヶ月前です。

５．日本サッカーの組織化と戦前の日本代表

１）極東選手権参加（1917）と中学大会の創設（1918）

中塚

大正の時代に話は戻るのですが、初の日本代表は東京高師のメンバーでした。大正 3 年、第 3 回極東大会出場の日本代表。この写真（竹内至著『日本サッカー外史』より）に、先ほど真田さんの話にありました芳賀綱吉さんが写っています。

メンバー全員賞状をもらったのでしょうか。

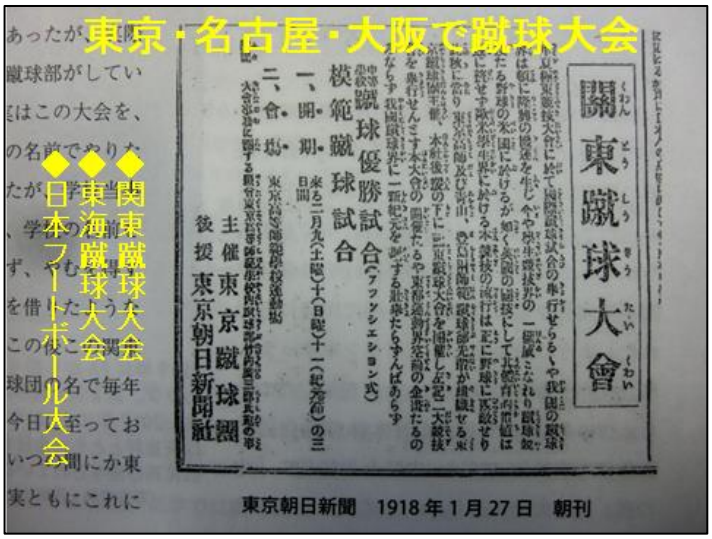
真田

賞状をみますと「大日本代表　芳賀綱吉」とあり、個人が賞状をもらったのだと思います。あるいはキャプテンだったのでしょうか。ちょうど写真の真ん中にいる彼です。もしかしたらキャプテンだったのかもしれないですね。何かご存知でしょうか。

中塚

お手許の資料の 10～11 ページに「茗友サッカー120 年の歩み」ということで、歴代主将の名前をわかる限り載せています。大正 6 年は渡辺敏綱さん、前列左端の方がキャプテンなので、芳賀さんではないですね。

先ほどの賞状には第 3 位とありましたが、実はこの大会の試合結果は悲惨なものでした。中国に 0 対 5、フィリピンに 2 対 15 の第 3 位です。



真田

出場したのは 3 チームだったのですね。

中塚

3 チームでした。ただ国際大会が開かれたということで、これを機に世間的にサッカーが注目され始めました。そしてさらに環境を整備しようということで、東京・名古屋・大阪で蹴球大会が開かれます。この大阪で開かれた日本フートボール大会が、いまの高校サッカー選手権大会につながっているということになっています。東海蹴球大会や関東蹴球大会もこの大会と同規模でした。むしろ関東蹴球大会は東京高師のお膝元なので、皇族や各国の大使の方々が観に来くるほど、大規模な大会だったようです。主催は東京蹴球団。これは東京高師、青山師範、豊島師範の卒業生を中心に作った、日本で最初のクラブチームです。内野台嶺が創設者です。朝日新聞社が後援です。

２）大日本蹴球協会創設（1921）と極東選手権優勝（1930）

中塚

このような大会が日本各地で開かれたことによって、「日本でもようやくサッカーの全国大会が開かれ、その予選会が開かれている」との誤った情報が英国に伝わり、FA からなんとトロフィーが送られてきました。日本選手権の優勝チームに、カップを渡してくれないかという意図があったようです。

ただ日本にはこれを受けとる蹴球組織がありません。さしあたり大日本体育協会がこの FA カップを受領します。日英同盟の頃です。大日本体育協会会長は嘉納治五郎です。嘉納治五郎は、当時東京高師蹴球部長を務めていた内野台嶺に対し、「カップを活かせるための全国大会を開いてほしい、さらにそれを担うための組織をしっかり作ってほしい」と伝え、それをきっかけに正式な大会・組織整備が進み、1921 年 9 月 10 日、今の JFA が誕生しました。

JFA の初代会長今村次吉さんは附属中の卒業生です。さらに当時、運営面で大変細かな仕事をされたのが、附属を出て帝国大学に行っておられた新田純興さんです。

極東選手権大会では、なかなか日本は結果を出せませんでした。しかしついに 1930 年にアジア初制覇します。この極東大会、最初に出たときのメンバーは全員東京高師でした。なぜなら当時は各チームから選手を選抜するのではなく、チーム対抗の予選を行って、優勝チームを中心にしながら補強選手を加えるというスタイルだったからです。しかしアジア制覇したこのとき、はじめて予選を行わずに優秀選手を全国から選考しました。

このような方針になったのは、この前年、蹴球協会の大きな改革・刷新があったことが背景にあります。それまでは大会組織の運営を師範学校系の人たち中心に動いていたのですが、次第に関東リーグを中心的に担っている早稲田や慶應、帝大などの人たちが運営するようになったようです。

1930 年の優勝監督、鈴木重義は附属 30 回生。主将は竹腰重丸、東京帝大卒です。フィリピンに勝って中国には同点だったけど、両国優勝でした。「主将の竹腰、試合後極度の疲労により宿舎の日本青年館まで田辺五兵衛が背負うも途中ズルズルと崩れ落ちる」、こんな記述がありました。

賀川

そうですね、竹腰重丸さん。私たちは親しくノコさんと呼ばせてもらい、直接教えてもらいました。大正から昭和にかけてのサッカーの指導者ですが、第 9 回極東大会のときノコさん自身は試合の前の日に精神を統一するために、お母さんからもらった短刀を夜中に眺めながら次の日の試合のために精神を統一したそうです。それをベルギーと日本のハーフであった後藤さん、愛称ゴットンさんという、背の高いフルバックの選手が目撃して、気持ち悪がられたというのを言っておられました。しかしそれぐらいノコさん自身もチーム全体が精神を統一して戦いました。

ノコさんは試合が終わった後、途中でチームメイトの肩を借りながら、いまの国立から日本青年館まで歩いて帰ったのですが、途中ズルズルと地面に滑り落ちたそうです。肩に手は置いているけれど掴む元気もなかったほどに精根尽き果てるまで戦ったということですね。

中塚

いま名前が出たゴットンさんというのがフルバックの後藤さんです。資料の 12 ページをみていただきますと、表の中で関東大学リーグ、第 1 回優勝が早稲田です。第 2 回は東京高師が優勝したのですが、第 3 回から東京帝国大学が 6 連覇します。そしてメンバーを見ておわかりのように、1930 年極東選手権の優勝メンバーは東京帝大が中心です。

東京帝大出身の牛木さん、コメントいただけないでしょうか。竹腰さんのことも含めてどうぞ。

1930 年 第 9 回極東大会の日本代表チーム。
後列左から２人目から鈴木重義監督、一人おいて井出多米夫、杉村正三郎、高山忠雄、阿部鵬二、野沢正雄、竹腰重丸（主将兼コーチ）若林竹雄、春山泰雄、市橋時蔵、西村清、前列左から本田長康、篠島秀雄、竹内悌三、後藤靭雄、手島志郎、斉藤才三
出典：日本サッカーアーカイブ（http://archive.footballjapan.jp/index.html）

牛木

私の生まれる前のことなのでよくわからないですけど、花山さん、手島さんなど、年取ってからもグラウンドに来てやっていますと非常に上手かったです。がむしゃらに走るというようなサッカーではなくて、力強くテクニックがあるというような選手でした。

竹腰さんは、後ろから来るボールを胸で落として右足のボレーでシュートして決める、という得意技があり、練習でよく披露していました。この人達の方が、僕らの頃の同年の連中よりも技術があったと思います。

中塚

ここに出ている春山泰雄さんは附属中出身で、旧制水戸高校から東京帝大で活躍された方です。この春山さんが中学生の頃、チョー・ディンからプレーを学んだ年代になります。

３）ベルリンオリンピック（1936）

中塚

極東選手権優勝は 1930 年のことですから、1932 年のロサンゼルスで日本のサッカーが飛躍した可能性があります。ただ 32 年の大会はプロアマ問題（ブロークンタイムペイメント＝休業補償を認めるかどうか）があり、サッカーが競技種目から除外されました。

そのようなこともあり、プレーヤーの何人かは引退し、中心選手だった竹腰重丸さんも引退しました。そのような混乱があったにも関わらず、その次の 1936 年ベルリンオリンピックで日本代表は「ベルリンの奇跡」と呼ばれる試合をするわけです。

賀川さん、このメンバー見てどうですか。例えば後列左後ろに金容植（キムヨンシク）さんがいらっしゃいますが。

1936 年　ベルリン五輪日本代表

賀川

そうですね、懐かしい顔がズラッと並んでいます。金容植の隣が右近徳太郎、この方は神戸一中。ゴールキーパーの佐野理平。高橋豊二さんは東大でセンターフォワード。松永行さんもどちらかと言えばセンターフォワードタイプで、川本泰三、松永行、高橋豊二と、センターフォワードタイプの人がズラッと並んでいました。ウィングには加茂兄弟がいました。川本泰三という一番右端に立っている選手が、「俺は指導者として成功しなかった」と本人はいつも言っていたのですが、戦後に指導者として自分のサッカーというものを作り上げました。竹内悌三さんもいらっしゃいます。日本サッカーの素晴らしい歴史をつくった 16 人ですね。

中塚

松永行さん、スウェーデンを 3 対 2 で破る 3 点目の決勝ゴールを決めた方は東京高師です。先ほど言いましたように志田中（現藤枝東高校）出身の松永三兄弟、三人とも志田中から高師へ行かれています。ただ、冒頭の映像にもありましたけれど、ガダルカナルで戦死します。

この写真は、数年前に茗渓会館で、松永行さんの三兄弟の一番下の松永碩さんを囲んで高師・教育大の古い方たちが集まったときの写真です。左が松永碩さん、中央が村岡博人さん、東教大 2 期生で附属の OB です。1954 年の W 杯予選の日韓第 1 戦でゴールを守っておられた方ですね。右が東教大 1 期生の永嶋正俊さん。みんな集まると日本サッカー史集合みたいな感じになるわけです。

４）中学大会の動向

中塚

東京高師によるサッカーの普及には、自分たちが指導したチームや卒業生が着任したチームを呼んで招待大会を開くということもありました。『東京教育大学サッカー部史』（1974）にはそのことについて竹内虎士さんが記されています（以下、引用）。

高等師範が全国蹴球大会をやり出したのは、大正 12 年のことで、当時の主将飯山春雄（文 1 丙）が言い出した提案だ。飯山氏はサッカーの名手と言われる程でもなかったが、こういった企てをはじめ、人を驚かせる名人であった。

1、2 年のさる例会の時、部員一同にこれを提案したのだが、全国大会の全国とは少し大きすぎるのじゃないか、全関東ぐらいでどうかという反論もあったが、関東とすると当時強かった静岡なども来られないではないかということもあり、全国大会を銘打って大会に踏み切った。

さて全国と言っても、どの範囲に招待状を出すかが問題となり、九州を除き、北海道・本州一円に、先ず師範学校を中心に招待状を出してみた。その頃師範学校は中等学校になっていたので、中学校・師範学校・商業学校のゴッチャナ大会だった。費用は当時ボールの専門店ミカドが引き受けてくれた。50 円出してくれた。今なら 30 万円ぐらいになるだろう。

さて大会を始めてみると、大塚のグラウンドは爆発するばかりだ。決勝・準決勝には地元の青山師範・豊島師範・附属中学・府立五中などが残るので応援団が入り切れない。午後から始まるというのに 10 時頃から青山は附属側、豊島は本校側と席を占領するので、土曜日は午前中から授業ができない程、人が集まった。

その頃武道でも全国剣道大会・柔道大会などをやっていたので、高師在校生はその盛会を目の当たりに見るので、全国的な視野が植えつけられたと思う。殊に全国のサッカーは我々が指導しているのだとするリーダーシップがある。その頃、大塚講和会などは全国を行脚して回ったので、当時の高師生は今よりはるかに視野は広かった。

ところが、盛大になるといろいろ文句がついてくる。これは一種のひがみだが、審判が悪いの運営がまずいのと言い出す（中略）。これを最も強く主張したのは大日本蹴球協会の理事会であった。協会は協会主催として中学大会を一本にしたいという意図があったので、一本に統制するには夏は高師の大会、冬は朝日新聞の関東大会がじゃまになった。朝日は運動部の山田午郎がどうしてもやめない。こちらは純情だから、遠き将来の日本サッカー界を考えるとどうしても一本にした方が良いじゃないか。それにサッカーは冬をシーズンとするもので、夏の暑いさなかにやるとは如何にもひどいじゃないかともっともらしく主張されると、ついそんな気持ちになるものだ。それにその頃高師のサッカー部は、かつての栄光の座からすべり落ちて、1 部と 2 部の間を往復していた頃で、発言力が弱かったのである。参加者の立場からすれば、年中大会があっては生徒は勉強する暇がないので、それは教育的にみてもよくないと、これも協会のつけた理屈だった。

純情な高師サッカー部はこのようにして潔く、協会に引き渡したが、朝日は当然年末の大会をやめない。ジャーナリズムは強いのである。少し早まったと後悔したが仕方がない。しかし協会は返還の主なる根拠、夏の暑い時サッカーでもあるまいという理由を打ち破って、2 年目に夏にやりだした。これには開いた口がふさがらなかった。（中略）いつか茗溪会館で関東蹴球協会の理事会が開かれたが、その時の関東協会長は内野台嶺氏であったが、その席上、真赤になった私は理事の面々に場所柄もわきまえず、くってかかったことを思い出す。

いま私は協会に何の恨みも持っていない。むしろ外国チームが来るごとに招待状を送ってくれるありがたさに感謝さえしている。しかしこの老人どもを大切にする思想につながる封建性は、若いものを大切にしないことにもなる。サッカー協会を老人の天国にしないで若人の力を投入するようにしてもらいたい。老人は改革を欲しないもので、また昔の中学生・高校生の統制令などを出すのではないかと心配しているのである。

大正 12 年に、招待大会・全国大会をやろうと当時の主将が言い出しました。全国という言い方は

少し大げさすぎるという反論もあったけど、当時強かった静岡も呼ぶためにも全国大会と決めました。九州を除いた北海道・本州の師範学校にまず招待状を出し、大会運営費用は、ボールの専門ミカドが引き受け、50 円も出してくれました。さて大会を始めてみると大塚のグラウンドは爆発するばかりで、決勝準決勝は観客が入りきれなかったそうです。土曜日の午後から始まるというのに朝の 10 時から青山は附属側、豊島は本校側を占領するので、午前中は高師の授業になりませんでした。そんなことが書かれています。

そのころ武道においても、高師の人たちの意識として常に全国を目指していた。特にサッカーは我々が指導しているのだというリーダーシップがあったということです。ところが、盛大になるといろいろ文句が出始めます。特に協会は、協会を主体として中学大会を一本化したいという意図があったので、一本にするには夏の高師の大会、冬は朝日新聞の関東大会が邪魔になりました。

というのも、協会は関西の大会を主催していた時代です。運営側は言われていることをしぶしぶ飲まざるをえない。年中大会があったら生徒は勉強する暇がないっていうのは、いまのトップレベルの高校生にも言えると思います。そしてこの「統制令をひく」というのは、おそらく野球統制令のことを指しているのでしょう。「文部省がやるようなことをサッカー協会がやっていいのか」と竹内虎士さんはおっしゃっています。

しかし協会は、夏の大会やめるよう言ったにもかかわらず、その数年後にまた夏にやりだしている。これは、ベルリンオリンピックが夏にあるから、大会は夏にやらなければならないのだという理由だったのですが、これには開いた口がふさがらなかったそうです。最後に、「サッカー協会は老人の天国にしないで若人の力を投入するようにしてもらいたい。また中学生高校生の夏の統制令を出すのではないか」とおっしゃっています。

東京高師主催の全国蹴球大会の一方で、関東蹴球大会の方は師範学校がずっと優勢でした。実際に高師主催のア式蹴球大会は、歴代優勝校を見てみますと、第 1 回が関東大震災の翌年ですが、暁星中が優勝。そして第 2 回からは附属中が連覇を成し遂げます。正式に附属中のサッカー部ができたのがこの少し前くらいです。第 8 回は志田中。ご存知藤枝東ですが、ここには後に高師サッカー部で活躍する松永行さんがいらっしゃいます。翌年は志田中に勝利しますが、第 9 回で終わってしまいます。終わった経緯は先ほど申し上げた通りです。

東京高師主催ア式蹴球大会

◆歴代優勝校（中学の部）
第1回（1924・大正13）暁星中（附属中は初戦で成城中に抽選負け）
第2回（1925・大正14）附属中3-1暁星中
第3回（1926・大正15）附属中6-0成城中
第4回（1927・昭和2）　附属中2-0五中
第5回（1928・昭和3）　附属中3-2五中
第6回（1929・昭和4）　附属中2-0五中
第7回（1930・昭和5）　附属中3-1湘南中
第8回（1931・昭和6）　志田中0-0再2-1(延長)附属中
第9回（1932・昭和7）　附属中5-3志田中
◆文理大　初の2部降格
1931（昭和6）年度の第8回大会は2部→1年で昇格
主将　河本春男（刈谷中→東京高師）
◆附属中の躍進
31

文理大。関東大学リーグの登録名では東京文理科大学ということになり、初の 2 部降格の時の主将が、先ほど話に出た河本春男さん。つまり東京高師の方はレベルが少しずつ低下してくるけど、その一方で附属がぐんぐん力をつけ、高師と附属の試合でも附属が勝つような状況もみられます。

こういった招待大会は関西の方でも盛んに行われていたと、先ほど休憩のときに賀川さんにお聞きしました。

賀川

関東大会とか東京高師主催のア式蹴球大会は、チーム数も非常に多いし、大きい大会だったのですが、関西では朝日新聞主催の高校野球に対抗して、毎日新聞が日本フートボール大会という大会をやり始めようということになり、ラグビーとサッカーの大会をやり始めたわけです。なぜラグビーとサ

ッカーを一緒にやり始めたかというと、毎日新聞はもともとラグビーの大会を開こうとしましたが、関西にはチームが三つか四つしかありませんでした。そこでサッカーを入れるとチーム数が十いくつになるため、開催できたようです。

そういうことで日本フートボール大会が始まったのですが、国立の神戸高商、今でいう神戸大学のことですが、神戸高商も神戸高商大会というのをやるようになりました。それが不思議なことに、広島から神戸高商大会には出てくるのですが、大正 10 年、12 年の頃は、日本フートボール大会には広島から出てこないのですね。交通手段である東海道線は神戸までです。神戸から向こうは山陽本線ですから、広島の人たちはより手軽な山陽本線で神戸まで試合に来ていたのかなと思います。そういう意味で、神戸高商主催のサッカー大会は広島勢が来るから、むしろ日本フートボール大会よりもレベルが高いと言われた時代もありました。

その広島勢のレベルが高いというのは、大正の始めに第一次世界大戦でドイツ人の捕虜がたくさん来て、松本（寛次）先生たちが習いに行ったというところに理由があります。そのような大会が、関西あるいは名古屋など各地でだんだんと行われ始めました。

中塚

広島の話が出ましたが、資料の 17 ページをご覧いただけないでしょうか。これは『広島サッカー 85 年誌』からの引用なのですが、広島のサッカーの始まりのことが書かれています。いま賀川さんの話にも出てきた高師出身の松本寛次さんが教員として着任し、広島一中、今の国泰寺ですね、そこでサッカーが盛んに行われていた様子、その下に「一中の悲運　校則の壁に泣く」という記事。これは全国選手権の、広島の予選でしょうか西日本の予選でしょうか、広島一中が勝ち上がったけど棄権した、その理由として校則が立ちはだかったという話です。当時の校長は、野球部の新聞社関係主催の対外試合の出場を禁止、他の運動部も学校関係以外が主催する大会に出場できなくなったと。人間形成が教育の目的、芸人や運動や演説使いを作ることが教育ではないとの教育観からだった。野球部員のそういったところが、サッカー部員にも影響した、もしかするとこういったムードが、広島勢があまり多くの大会に出場できなかった背景にあるのかもしれません。

ここでまとめます。

戦前の東京高師・文理大は、日本サッカーの普及に貢献しました。それもさまざまな形で貢献しました。トップレベルの選手の担い手でもありましたし、サッカーの組織化にも貢献しました。現役は一時期、1 部と 2 部を行ったり来たりしましたが、いずれも河本主将、原崎主将、松永主将のもとで 1 年で復帰を果たします。

1942 年は松永主将を中心に 1 部昇格を目指して健闘した年です。1 部復帰の宿願も達成しました。翌、昭和 18 年、リーグの成績は 4 位に留まりました。第 2 回関東大会では帝大に善戦しました。

大戦中の数年間

「追想」中村章（昭和19年9月卒業、愛媛大学教育学部）『東京教育大学サッカー部史』

◆昭和17(1942)年

「松永信夫主将を中心に、1部昇格を目指して健闘した年です。慈恵大・農大・法大・拓大・工大に全勝して宿願を達成しました。」

◆昭和18(1943)年

「18年は、近藤豊蔵主将の年ですが、リーグの成績は上のように（帝大・早大・慶大・文理大・立大・明大）、第4位にとどまりました。なお、大日本学徒体育振興会蹴球部関東支部主催の第2回関東選手権大会の成績は次のように、1回戦に敗退したとはいえ、優勝校の帝大に善戦しました(全文大0-1全帝大)」

◆昭和19(1944)年

「19年、私達が4年生になった時には、もうサッカーどころではありません。赤羽被服廠や栃木県の農家へ勤労動員で駆り出され、6ヵ月の短縮で9月卒業。陸・海・空へと四散していきました。謝恩会を、大曲の旅館で暗幕を張った灯火管制の下でやったことを思い出します。」

「スポーツは全面的に禁止され、体力増強・精神力養成を目標とした官制的行事が、半強制的に推進されて来たわけである。自由にボールが蹴れる時代は、本当に幸せな時代である。いつまでもボールを蹴り、ボールから学んでいきたいものである。」

しかし昭和 19（1944）年、「私たちが 4 年になったころはもうサッカーどころではありません」。勤労動員の話もあります。「スポーツは全面的に禁止され、体力増強・精神力養成を目標とした」活動ばかりです。「自由にボールが蹴れる時代は本当に幸せな時代である。いつまでもボールを蹴り、ボールから学んでいきたいものである」という中村章氏の手記が『東京教育大学サッカー部史』にあります。

６．戦後初の全日本選手権と前座試合（1946）

中塚

さて、こちらからのプレゼンとしては最後になりますが、資料の 18～19 ページをご覧ください。

戦争のひどい時代が 1945 年に終わります。そしてその翌年の 5 月 5 日に、早くも全日本選手権が復活します。第 26 回大会です。1946 年 5 月 5 日、東大の御殿下グラウンドで 1 試合だけ行われます。東の予選を勝ち上がったのが東大ライトブルー、そして西の予選を勝ち上がったのが神経大クラブ。神戸経済大クラブのフォワードに、賀川弟・賀川兄の名前があります。そして「私の天皇杯」というコメントを賀川さんが寄せておられます。その賀川さんがここにいらっしゃる賀川さんです。

ついでに言いますとその試合の前座として、中学校の東日本チャンピオンと西日本チャンピオンの試合が行われております。それが 19 ページの手書きの新聞で、これは校内新聞なのですが、「全国制覇なる　桐陰史中最大の勝利」と見出しがあります。東日本代表の東京高師附中、西日本代表の神戸一中が日本一を決める試合を行い、1 対 0 で高師附中が勝ったということです。

まずその試合の監督からコメントをいただきたいと思います。実は小栗さんが、この試合に学生監督としていらっしゃったそうです。

小栗

そのときに監督をしたのですけども、終戦直後だったものですから参加チームもそんなに多くありませんでした。ここで勝てた理由は、戦争中、普通のだいたいの学校は勤労動員かなにかしらの理由で部活動を止めていた中、附属ではサッカーを続けていたからです。食料事情もありますし、昔のように猛練習はできませんでしたが、続けていたことで強くなったと思いますね。

いまの連中は芝生の上でサッカーができて羨ましいよと、よく仲間と話します。私も 82 歳までボールを蹴っていましたが、体力がなくなってやめました。一度芝生の上でサッカーを思う存分やってみたいと思います。

中塚

この同じ年に中等野球、いまの高校野球にも附属は出場しています。ベスト 8 で浪商に負けて、負けたあとに土を持ち帰りました。その当時、甲子園は米軍が接収していましたので西宮球場でしたが、これがもとでその後、敗戦チームが甲子園の土を持ち帰る習慣になったそうです。

当時、サッカーと野球の両方の大会に出た人がいるって聞いていますが…

小栗

若山という選手です。

中塚

当時はサッカーだけじゃなくて、両方やっていたということですね。

小栗

そう。若山はピッチャーでした。サッカーも上手かったので、引っ張り出してほぼメンバーに入っておりました。ライトインナーで出ておりました。

中塚

ちなみにこの手書きの新聞の一番上の段の左の方を見てみると、陸上部の人もこのチームにいたわ

けですね。賀川さん、ホームの東京で迎える形になった東京高師附属中に対して、電車を 12 時間も乗り継いで来られたアウェーの神戸の側の心境をお願いします。

賀川

いまでいう天皇杯決勝のその試合の前に、神戸一中の後輩たちがなんかしょんぼりと固まっているから「どうしたの」と聞くと、「いや附属に負けたのです」と。「え、附属と試合したの」という話をしました。

戦争が終わってとにかく死なずに帰ってきて、再びサッカーをやり始めたころです。予選を関東と関西でやるということになり、西日本は西宮の芝生のグラウンドで開かれました。チームも集まりました。通常は関西学院が強いのですが、どういうわけか決勝は神戸大学の神経大クラブと学士クラブでした。実はこの決勝で学士クラブが勝ったのですが、学士クラブには早稲田の理工学部を出て、そのままサッカーをやっていた宮田孝治が入っていました。宮田さんはのちにアジア大会の日本代表にもなりますけど、私より 2 年上です。学士クラブというのは帝大系の卒業生でなければだめなので、違反です。そのような理由で 2 位の神経大クラブ、いまの神戸大学に、東京に行って試合しろと関西協会で決めたのですね。

それで指定の夜行列車に乗ったら乗客が多く、みんなデッキまではみ出していました。デッキで立ち寝してもあるいはデッキに横になって寝てもいいのですけど、お客さんの赤ちゃんが夜中泣き出してですね、みんな立ったまま東京までやってきて、関東協会の乗富理事長のお宅に泊まりました。

理事長には非常に歓待を受け、そのお宅では久しぶりに仲間とサッカーの話ができて、みんな骨抜きになってしまい、試合に来たのか分からないような様子になったのですね。

そして試合会場である東大に行って、いきなりキックオフです。東大はひとつパス出したらすぐシュート打つのですよ。「あれ？」と思ったらすぐ後ろがゴールなのですね。西宮のグラウンドと比べたら 20 パーセントくらい狭いのかな。あっけにとられてしまいました。

ぼくのチームには、則武という足の速いフォワードや、それと名越という、神戸三中で僕と試合相手だった選手もいました。神戸三中が戦前の最後の全国大会の決勝まで行って普成中学に負けたときの選手ですね。そのような良い選手もいたのですが、いきなり則武と名越が足を痛めてピッチを出てしまい、9 人になりました。9 人になれば、いくら私の兄の賀川太郎がひとり頑張ってもいい加減な試合になってしまい、結局 6-2 で大敗しました。以来、東大とは相性が悪く、その後、朝日招待で対戦した際もたくさん点を入れられて負けてしまいました。

大敗はしましたが、当時の状況としては、みんな戦争から帰ってきたばかりで、嬉しかったのです。文科系の大学ですからね。早稲田や東大でしたら理科系の学生も残っていましたけれど、ほとんどみんな兵隊から帰ってきて初めて顔を合わせて、サッカーの話を一晩中できるものだから。一晩中サッカーの話をし、まったく戦闘意欲に欠けた試合をしてしまいました。我ながら「いやあ、もったいないことをしたなあ」と思っております。まあそれでも、東大の縦の強さというか、そういうものはよくわかりました。

わかりましたけど、「なんでこんな狭いグラウンドで試合せにゃならんのだ！」というのは当時の一番の感想でしたね。

７．参加者・演者より

１）参加者より

細貝貞夫（YC&AC 理事）

横浜カントリーアンドアスレチッククラブ（YC&AC）の細貝と申します。本日はお招きいただきありがとうございます。いつも筑波大学サッカー部の方々とは交流戦を通じて楽しくサッカーをさせていただいております。

せっかくの機会なので、スポーツの歴史という大きな点から言って YC&AC がどんなことをやってきたかということについて少しお話させていただきたいと思います。

まず、最初に日本で行われたスポーツの試合はクリケットでした。1862 年頃です。このゲームのちょっと後に生麦事件というのがありまして、イギリスの方が馬に乗ったまま薩摩藩の行列に突っ込んじゃって無礼討ちになりました。この死んだ人が、実はクリケットの試合の写真に写っています。この人物が生きているままで写真に残っているのはその写真だけらしいです。

この試合、YCC（横浜クリケットクラブ）の母体だったチームがオカ（陸）チームと、イギリス海軍の艦隊の将校（艦隊チーム）とが対戦をしたそうです。この試合、もうひとつユニークなのが、選手は全員武器を持って試合をしました。なぜかというと、そのころ日本は尊王攘夷で非常に物騒な情勢で、外人がいっぱい集まると襲撃をされるかもしれないという危険性があったため、全員武器携行で試合を行ったようです。

我々、一応歴史を見直していこうということをやっているのですが、この絵ですね。牛木さんは本当に富士山が見えたのかということをおっしゃっていましたけれど、このクラブのグラウンドが最初にあったのが、いまの横浜スタジアムがあるところです。むかし彼我公園と呼ばれておりました。それで居住外国人と日本の方とがお互い共有できる公園の中に、クラブは場所を借りてスポーツをやっていました。

関内駅も目の前なのですが、JR 石川町の駅に電車が入ってくるときに富士山が見えるのです。サイズがあんなに大きいかと言われるとそうでもないのですけど。だから富士山が見えなかったこともないかなと思います。

お話にあったように、旗、YFC と書いてありますけども、これは横浜フットボールクラブでありますが、このときこのフットボールクラブはラグビーをやっておりました。

もうひとつ、これは私の想像の部分もあるのですが、クリケットについてはイギリスのクリケット博物館に、先ほど申し上げたゲームの記録が残っています。ラグビーに関しましては、The Ten Oldest rugby club in the world っていうのがありまして、これはラグビーの世界的に歴史の古い 10 のクラブという意味ですが、そのうちのひとつに YC&AC が加えられています。さらに、つい最近の話なのですが、サッカーでもイングランドで最も歴史が長くて今も活動しているクラブで、シェフィールドフッ

トボールクラブというのがあるらしいのですが､そこがどうもワールドツアーを計画しているらしく、日本でも対戦相手として YC&AC とやらないかという打診が来ております。ちなみにうちのクラブは 1868 年創設ということになっておりまして、年代を見るとマンチェスターユナイテッドよりも歴史があるということでございます。

最後に、みなさんお集りの方には言っておいた方がいいのではないかと思いますが、1868 年に YC&AC が創設されましたと我々は言っているのですけど、なぜそのように決めたかという話をいたします。

ジェームズ・モリソンというスコットランド人が創設者なのですが、彼がクリケットのゲームの時にお茶のサービスをしました。ただ単純にゲームをやって終わるというだけではなく、お茶を出すというのがクラブのスピリットとして初めて具現化しました。その年をクラブ創設の年としています。

ですので、東京教育大学時代に YC&AC にサッカーに来られた方も、ハーフタイムに半分に切ったミカンと、ゲームが終わった後にサンドイッチと紅茶とかビールとかを口にしたのではないでしょうか。我々としてはクラブのスピリットは今でも続けています。横浜でここからもそんなに遠くありませんので、ぜひみなさんお時間あるときは横浜に来て、我々のクラブにもお立ち寄りください。ありがとうございます。

松本光弘（筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ会長）

ご紹介いただきました松本です。YC&AC には毎年お世話になっています。

本年、筑波大学蹴球部は、皆さまのささえを受けながら 120 周年を迎えることができました。パーティも終わり、記念誌も、この会に間に合うようにということで、急ピッチで作業を進めまして、とくに中塚理事長が大変な作業を担ってくれました。

私は戦後のことにつきましてはほとんどのことがわかるのですが、戦前のことになるとほとんどわからない。文書の上で探すほかないわけですが、今回の記念誌で戦前のことがだいぶ明らかになりました。こういういきさつがあったのかということがありますので、もしできることでしたら皆様のお手許に 1 冊置いていただければ、参考になるのではないかと思います。

これからも私たち筑波大学蹴球部関係者、努力して日本のサッカー発展のために尽くしてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日はどうもありがとうございました。

２）演者より

賀川

本日はお招きいただいてありがとうございます。何しろもう 92 歳になって、しっかり喋ろうと思うと総入れ歯が動くようになっております。最近のことはよく忘れるようになりましたけども、昔のことはまだ覚えていますからまたなにかあったらお呼びください。よろしく。

牛木

ちょっと追加の情報を申し上げますと、先ほど金沢四高から東京高師に行ったデハビラントさんという方のお嬢さんがふたり女優になったという話がありましたが、すぐネットで調べてくれた人がいて、上の方のお嬢さんのオリビアさんは 100 歳でご存命だそうです。妹さんのジョーン・フォンテインさんの方は 91 歳で亡くなられたそうです。追加情報。

真田

どうも今日参加させていただきましてありがとうございました。生きた歴史を学ばせていただいた

と思っております。さらにですね、歴史を振り返るということはすごく大事なことなのだなと思いました。高等師範や筑波大学の蹴球部が、定期的に歴史を振り返っていけるということが素晴らしいと思いました。それが結局スポーツを文化として位置付けていくことにつながるだろうと思います。

これからもときたま歴史を振り返ることを一緒にやっていければなと思います。どうも今日はありがとうございました。

中塚

どうもありがとうございました。今回は大戦前までの時期を中心に振り返る機会でしたが、戦後の復興から今日に至るまで、そこにはまた別の、いろんな先輩たちの積み重ねがあります。そこにも目を向けながら、機会を作ってまたこのような会を開いていきたいと考えています。

明日、新たな歴史をつくろうとしているインカレ決勝。これもすごく楽しみです。

本日はどうもありがとうございました。

＜参加者アンケート＞

※アンケート回答者のうち「報告書に掲載してもよい」方について順不同で掲載します（敬称略）

川戸 湧也（筑波大学大学院）

どなたのお話も非常に興味深く拝聴させていただきました。特に日本サッカー草創期の話題では、普段からなじみのある人物が多く登場し、彼ら（特に嘉納師範）の功績について改めて知ることができました。ありがとうございます。

釜山　宏（株式会社デサント）

戦前の日本サッカーについて貴重な話が聞けて良かった。関西出身の為、東京の学校については今の状況とイメージが結びつかないので理解しにくいことも多かったが、先人の足跡をたどることができた。賀川さんが神戸に絡んだ話をされていたので、気持ち的に最後までついていけました。

守屋 佐栄

プーチンが来日し､講道館に寄ったというニュースがあったばかりの今日､嘉納治五郎の話を聞き、驚きました。師範学校の役割をサッカーの話しを通じて少し知りました。エリートである彼らの優秀さに目を見張ります。

阿部 貴弘（専修大学）

大変貴重なお話を聞けて、光栄でした。ありがとうございました。

張　寿山（明治大学）

父が高師サッカー部（1932 年）だったので、当時の様子を思い浮かべる事ができました。

フローラン ダバディ（フリーランス）

日本のサッカー文化を知り、そのルーツの数々のエピソードを聞いて楽しかったです。

匿名希望（ビバサッカー研究会）

そうそうたる演者の方々だけあり、3 時間という時間があっという間で、むしろもっと話が聞きたかったと思うほど内容が充実した会でした。ありがとうございます。

匿名希望

歴史を振り返るということは非常に貴重なことであり、その歴史は必ず現在に大きな影響を与えるのだと改めて認識させていただきました。世代が違う事もあり、深いお話と演者の方のパワフルさに感銘を受けました。

匿名希望

極東選手権初参加から来年で 100 年というタイミングで貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございます。

匿名希望

非常に興味深かったです。ありがとうございました。